

号住居跡との関係を考慮すると、本住居から第9号住居跡に移った可能性が高く、7世紀前葉～中頃を中心とした時期と考えておきたい。

第11号住居跡 (第36図)

第11号住居跡はF・G-4グリッドに位置する。第3号溝跡の南にあり、第13号住居跡を切って構築されていた。住居中央からカマドにかけて大きな攪乱穴があり、遺構の遺存状態は良くない。

平面形は整った方形で、規模は長軸長3.56m、短軸長3.17m、深さ0.30mである。主軸方位はN-25°-Eを指す。

床面は平坦である。カマド前面付近は硬く踏み固められていた。覆土は暗褐色土を基調とするが、攪乱のために堆積状態は不明確である。

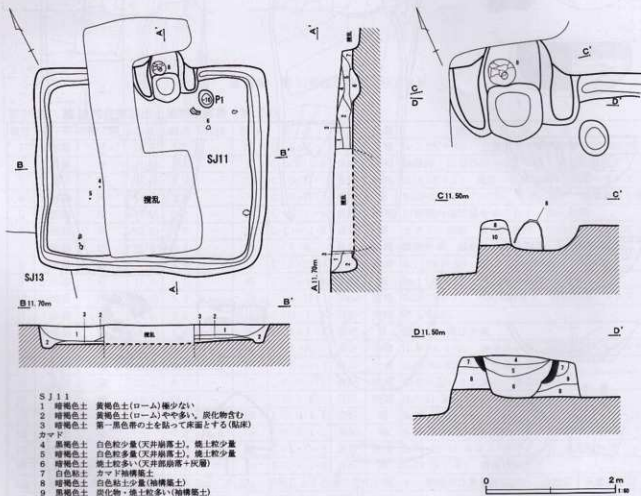
カマドは北壁に設置される。煙道部は攪乱を受け

ている。残存長は75cm。焚口部が一段低く掘り込まれていた。燃焼部中央からやや左に寄った位置に、口縁部から胴部上半を欠いた土師器甕が逆に伏せた状態で出土した。支脚に転用されたものであろうか。袖部は白色粘土を主体に構築され、内壁は強く被熱していた。

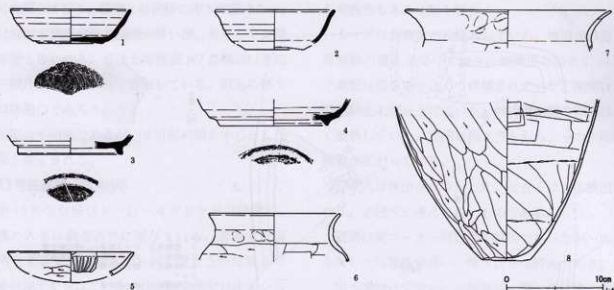
貯蔵穴は存在しない。ピットは1本カマド脇から検出されたが、柱穴ではない。

壁溝は全周する。深さ3～10cm。

出土遺物は少ない。覆土を中心に土師器杯・甕・小型甕、須恵器杯・高台付杯が出土した(第37図)。1は須恵器杯。底部回転糸切りであるが、まだ扁平な器形を保っている。東金子産。2は南比企産の須恵器杯。カマド出土。3・4は湖西産の高台付、混入か。5の北武蔵型暗文環も混入と思われる。6は



第36図 第11号住居跡



第37図 第11号住居跡出土遺物

第11表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	坏	(12.4)	3.5	(6.6)	45	G・I	良好	灰白	カマド ロクロ右回転 底部回転糸切り 東金子産
2	須恵器	坏	(12.2)	3.5	—	10	G・I・J	良好	灰	カマド ロクロ右回転 南比企産
3	須恵器	高台坏	—	2.0	(10.6)	10	G・I・K	良好	灰白	№6(床+24) 底部へラ記号 湖西産
4	須恵器	高台坏	—	2.7	(11.2)	15	G・I・K	良好	灰白	№5(床+28) 底部回転ヘラケズリ後高台貼付 湖西産
5	土師器	坏	(12.9)	2.4	—	10	G・H・I	良好	明褐	攪乱 北武蔵型暗文坏 内面に放射暗文を施す
6	土師器	小型甕	(13.6)	4.9	—	25	C・G・H・I	良好	褐	№9(床+4) 口縁部ヨコナデ 指頭痕 胴部ヘラケズリ
7	土師器	甕	(21.0)	4.3	—	10	C・G・H・I・K	良好	褐	カマド 口縁部ヨコナデ 指頭痕 胴部ヘラケズリ
8	土師器	甕	—	16.6	4.8	95	C・E・G・H・I	良好	褐	№10 胴部外面ヘラケズリ

小型台付甕であろう。7・8は武蔵型甕。カマド出土。8は伏せられた状態で出土した。その他、竪形炉系の製錬炉内洋が1点(377.64g)出土した。住居に伴うものではないが、炉壁が浮に噛み込んだ状態が観察された。

時期は須恵器坏と土師器甕から8世紀後半(4/4期)頃と推定しておきたい。

第12号住居跡 (第38図)

第12号住居跡はG-4・5グリッドに位置する。

第12表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	(15.4)	2.0	—	25	I・J・K・L	良好	灰	№14 沈殿状 南比企産か SJ12-2と同一個体の可能性
2	須恵器	蓋	(15.2)	2.1	—	10	I・J・K・L	良好	灰	SJ12-1と同一個体の可能性 南比企産か
3	土師器	坏	(11.9)	3.3	—	60	C・E・H・I	良好	褐	№1(床+3) 北武蔵型坏 内面の凸凹顕著 ヨコナデ丁寧
4	土師器	坏	(12.0)	3.0	—	10	I・J	良好	褐	体部ヘラケズリ 雲母状微粒子 混入か
5	土師器	甕	—	1.1	8.4	5	A・D・E・G	普通	淡褐	№15(床+21) 非在地系か 底部木葉痕
6	土師器	甕	23.9	13.4	—	40	C・D・G・H・I	良好	褐	№3 3~7・9・10(床+0~12) 外面に煤付着
7	土製品	羽口	長さ3.1cm	通風孔先端部の破片	先端部は丸く溶損					胎土は白色粒子を多量に含む 14.59g

周囲は攪乱が激しく、遺構の遺存状態は悪い。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長5.16m、短軸長5.00m、深さ0.51mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

床面は一部しか残存せず、詳細は不明。覆土はローム粒子を多量に含む暗褐色土を基調としていた。

カマドは北西壁の中央付近に設置されていたが、その大半が削平されており、詳細は不明とせざるを得ない。貯蔵穴・ピットは検出されなかった。

内に位置しており、厳密には住居に伴う保証はない。5は底部木葉痕が残る器壁の厚い甕。おそらく東関東系甕と思われる。6は土師器壺。7は轆轤口先端部の破片。先端部は丸く溶融している。鍛冶に伴う小口径羽口であろう。

時期は不明確であるが、8世紀初頭を中心とした時期と推定される。

第13号住居跡(第40図)

第13号住居跡はF・G-4グリッドに位置し、遺構の大半は調査区外に延びている。重複する第11号住居跡に東隅部を切られ、覆土上面は第3号溝跡の削平を受けていた。住居跡南半分は床面から掘り方まで達する攪乱を受け、遺構の遺存状態は悪かった。

平面形は方形系統と推定される。残存規模は長軸長4.13m、短軸長2.16m、深さ0.35mである。主軸方位はN-32°-Eを指す。

床面は貼床されており、硬く締まっていた。掘り方は方形周溝状に巡ると想定される。覆土は焼土粒子と炭化物粒子を多量に含み、人為的に埋め戻され

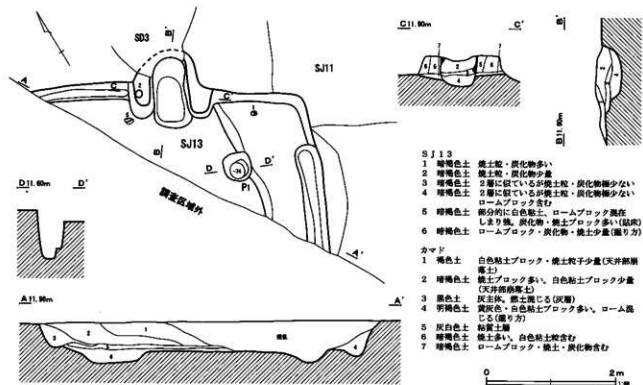
た可能性もある(第1層)。

カマドは北東壁に設置されていた。煙道部は第3号溝跡の攪乱を受けていた。燃烧部は長さ1.14mで奥壁は壁を切り込んで構築されていた。袖部は灰白色粘土を積み上げていた。燃烧部内側の側壁は強く被熱していた。底面は掘り方をもち、その上面に灰層が広がっていた。

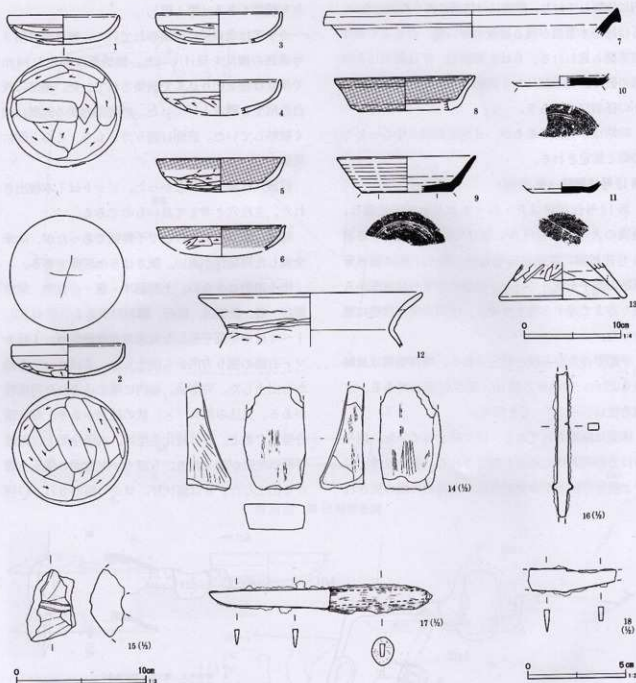
貯蔵穴は検出されなかった。ピットは1本検出された。主柱穴と考えて良いものである。

壁溝は東コーナー付近で不鮮明であったが、本来全周した可能性が高い。深さは5cm前後である。

出土遺物は少ない。土師器環・甕・台付甕、須恵器環・甕、鉄製品、磁石、轆轤口がある(第41図)。1~4はやや扁平化した丸底の北武蔵型環。1はカマド右脇の掘り方内から出土した。2はカマド左袖から出土した。完形品。袖内に埋め込まれた可能性がある。見込み部に「X」状の線刻がある。5は落合型環である。6は続比金型環。内面全面と口縁部外面は赤彩が施される。5はカマド前面の覆土層から出土した。8は盤状環。ロクロ整形され、口唇



第40図 第13号住居跡



第41図 第13号住居跡出土遺物

部内面に浅い沈線が1条巡る。底部は厚く、外面手持ちヘラケズリ調整される。全面赤彩が施される。胎土中には角閃石の他に銀雲母状のキラキラ輝く微粒子が目立つ。カマド内出土。9は須恵器杯。底部は外縁部を回転ヘラケズリ調整するが、中心部は粘土の亀裂が残り、ヘラ切り後無調整と思われる。内底面も周縁部が高く中心に向かって低くなる。上野(西毛)産と考えるべき。14は砥石。15は隼羽

口片。基部に近い部分であろう。変色はない。断面多角形風の面取りがなされている。16は鉄鏃基部、棘篋被がみえる。17は刀子で、木柄が遺存する。全長11.4 cm、刃部長6.2 cm、背幅0.3 cm。図示した以外に柄形滓が264.44 g出土している。

時期は1・2の土師器杯などから、8世紀前半(2/4期)中心と推定される。

第13表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	11.5	3.0	—	95	C・F・G・I・K	良好	橙褐	No1 (床+7) 器面全体に磨耗
2	土師器	坏	11.5	3.4	—	100	C・H・I・K	良好	褐	No4 (床+17) 内面に「X」のへう記号 雲母状微粒子
3	土師器	坏	(12.8)	3.1	—	20	C・G・H・I	良好	褐	雲母状微粒子
4	土師器	坏	(12.4)	3.4	—	25	C・G・H・I	良好	淡褐	カマド 雲母状微粒子
5	土師器	坏	(13.0)	3.4	—	40	G・I	良好	淡褐	No2 (床+18) 口縁部外面及び内面赤彩 落合型坏
6	土師器	坏	(13.2)	2.5	—	10	G・H・I・J	良好	褐	カマド左袖 覆土 口縁部外面及び内面赤彩
7	須恵器	壺	30.0	3.3	—	10	G・I・J・K	良好	灰	外面光沢のある黒色(濃緑色)の自然釉がかかる
8	土師器	坏	(14.6)	3.5	9.6	20	G・H・I	良好	淡褐	カマド 内外面赤彩 底部持ちヘラズリ 盤状坏
9	須恵器	坏	(14.2)	3.7	(9.4)	25	G・I・K	良好	黄灰	攪乱内 西毛産 底部回転ヘラズリ ロック右回転
10	須恵器	坏	—	1.0	(8.4)	20	G・I・J	良好	灰白	攪乱 南比企産 底部回転ヘラズリ
11	須恵器	坏	—	1.1	(6.0)	30	G・I・J・K	良好	灰	攪乱内 南比企産 混入 底部回転系切り
12	土師器	壺	(22.8)	5.6	—	30	C・G・H・I・K	良好	褐	カマド右袖
13	土師器	台付壺	—	3.9	(13.0)	70	C・G・I・K	良好	淡褐	カマド 脚部下端ナデ 上端ズリ内 内面木口ナデ
14	石製品	砥石	長さ8.0cm	幅4.8cm	厚さ4.6cm	127.89g	安山岩			正面及び左側面に鋭いキズ跡(刃ぎざ跡)がみられる
15	土製品	羽口	長さ3.7cm	37.95g	外面ナデ		白色粒子・赤色粒子の混入多い			体部横断面形は多角形
16	鉄製品	鉄鏃	カマド 残長7.4cm	頸部幅0.6cm	頸部厚0.3cm					棘部被
17	鉄製品	刀子	長さ11.4cm	刃部長6.2cm	刃幅0.9cm		青幅0.3cm			木柄残存
18	鉄製品	刀子	残長4.5cm	刃部長1.9cm	刃幅1.7cm		青幅0.3cm			

第14号住居跡 (第42図)

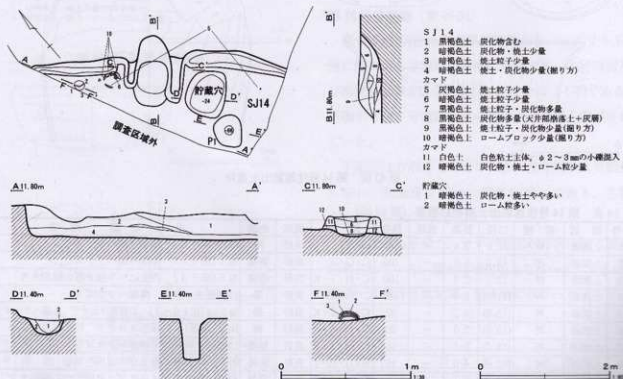
第14号住居跡はI-5グリッドに位置する。大半は調査区外に延びるため、遺構の詳細は明らかにできない。

平面形は方形系と推定されるが不明。残存規模は長軸長3.90m、短軸長1.59m、深さ0.35mである。

主軸方位はN-41°-Eを指す。

床面は平坦で、全面貼床が施されていた。覆土は炭化物粒子と焼土粒子混じりの黒褐色土を基調としており、自然堆積と思われた。

カマドは北東壁に設置される。燃焼部は僅かに壁を切り込んで構築されていた。袖は白色粘土を用い



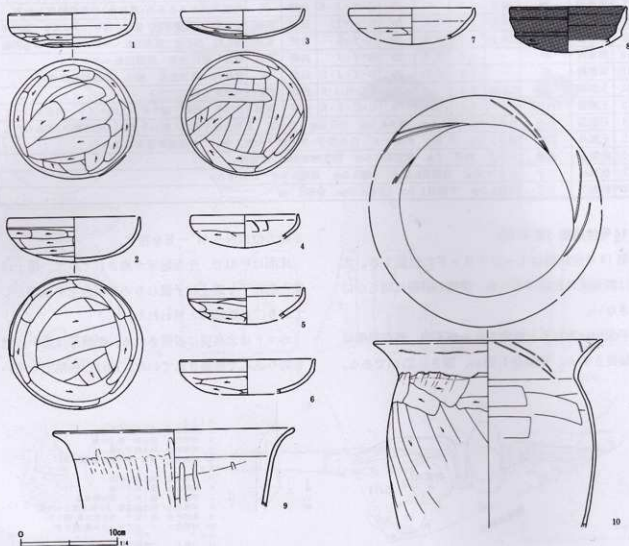
第42図 第14号住居跡

て構築されていたが、袖幅は薄いものであった。

貯蔵穴はカマドに向かって右側に設置されていた。
不整円形プランで長径70cm、短径60cm、深さ24cm。
ピットは1本検出された。主柱穴と推定される。

壁溝は巡っていた。深さ7cm以下と浅い。

調査できた部分が少ない割に出土遺物はまとまっている。土師器・環・甕・甔がある(第43図)。1～7は丸底形態の北武蔵型環。1～3は伏せた状態で3枚重なって出土した(上から2・1・3の順)。8は有段口縁環。黒色処理される。9は甔か。胴部



第43図 第14号住居跡出土遺物

第14表 第14号住居跡出土遺物観察表(第43図)

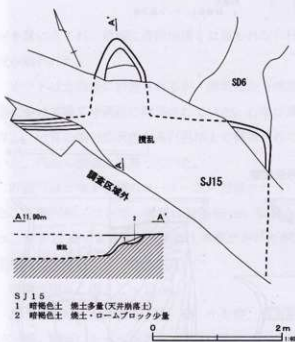
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	環	12.9	3.4	—	95	C・I	良好	褐	No.4(床+6) 体部外面ヘラケズリ
2	土師器	環	13.5	4.6	—	100	C・G・I	良好	淡褐	No.1(床+8) 体部外面ヘラケズリ
3	土師器	環	12.7	2.9	—	100	C・H・I・K	良好	橙褐	No.5(床+4) 内面にヘラ描き様の線刻あり
4	土師器	環	(11.0)	2.5	—	25	C・E・G・H・I	良好	褐	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
5	土師器	環	(12.0)	(3.2)	—	30	C・H・I・K	良好	褐	No.2・3(床+0~7) 口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
6	土師器	環	(13.9)	3.5	—	20	C・H・I・K	良好	褐	No.2(床直) 口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
7	土師器	環	(13.0)	3.1	—	15	C・H・I・K	良好	淡褐	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
8	土師器	環	(12.0)	4.0	—	15	E・G・H・I	良好	淡褐	口縁部外面及び内面黒色処理
9	土師器	甔	(24.6)	8.1	—	20	D・H・I・K	良好	橙褐	貯穴 胴部外面ヘラケズリ後縦方向の弱いナデ
10	土師器	甕	23.4	19.3	—	70	C・I	良好	明褐	No.2(床直) カマド 胴部ヘラケズリ 口縁部接合痕

外面縦方向のナデ調整。内面は粗いミガキ風の調整痕が残る。10はカマド脇の床面に伏せた状態で置かれた土師器武蔵型甕。底部は欠失していた。口縁部内面に2本単位の細い篋描沈線が4箇所刻まれていた。性格は不明。他に桃形滓が155.46g出土している。

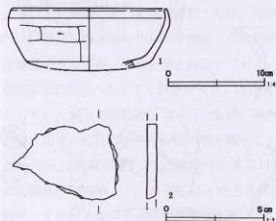
時期は8世紀前半と考えられる。

第15号住居跡 (第44図)

第15号住居跡はH-4・5グリッドに位置する。



第44図 第15号住居跡



第45図 第15号住居跡出土遺物

第15表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	甕	(16.0)	5.6	—	45	C・G	良好	橙褐色	口縁部はやや内屈気味 体部手持ちヘラケズリ
2	鉄製品	不明	残長5.3cm	残厚0.5cm	板状	—	—	—	—	—

住居の大半は調査区外に延び、擾乱も受けているため、遺構の遺存状態は極めて悪い。また、重複する第6号溝跡の削平も受けていた。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.98m、短軸長2.11m、深さ0.30mである。主軸方位はN-28°-Eを指す。

床面及び覆土の状態は削平により明らかにできない。

カマドは北東壁に設置されるが、煙道部の先端が検出されたのみで、燃焼部は擾乱によって破壊されていた。貯蔵穴、ビットの有無は不明確である。

壁溝はカマド西側では辛うじて検出できた。深さ約5cm。

出土遺物は少ない。土師器環と鉄製品残欠がある(第45図)。1は土師器環。鉢とした方が良くかもしれない。腰を境に弱い丸底風の底部に移行する。2は板状鉄製品。重量感があり、铸造製品と推定される。混入品の疑いがある。

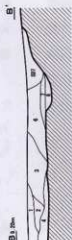
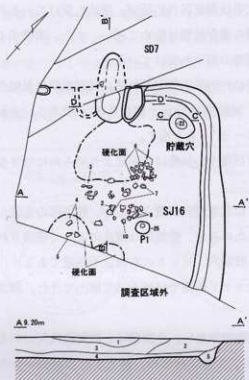
時期は不明確である。壁ラインよりも大きく延びるカマドの形態と土師器環から8世紀代と推定するに留めたい。

第16号住居跡 (第46図)

第16号住居跡は調査区最南端のS-9グリッド、南に開口する谷地形の斜面に位置する。住居西壁及び南壁部は調査区外に延びるため全容は不明である。重複する第7号溝跡によってカマド付近を削平されていた。

平面形は方形系と考えられる。残存規模は長軸長3.36m、短軸長3.18m、深さ0.36mである。主軸方位はN-39°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面が非常に硬く踏み固められていた。覆土は暗褐色土をベースにするが、第2・3層は自然堆積、第4層にはロームブロック



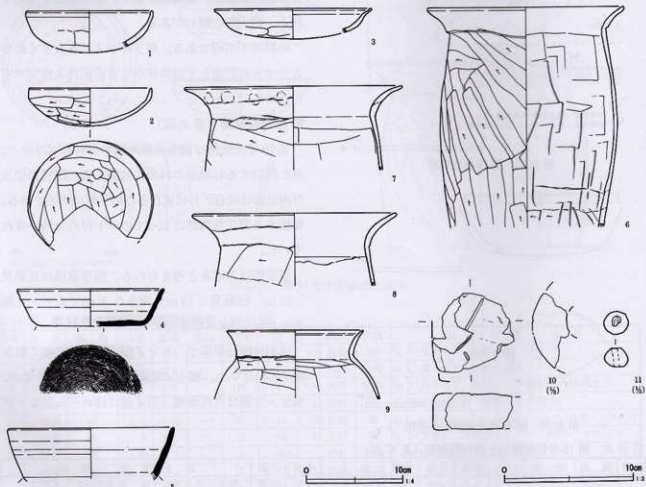
SJ16

- 1 灰褐色土 焼土粒多い
- 2 暗褐色土 灰化物多い、焼土少量、自然の地層
- 3 暗褐色土 灰化物多い、焼土層多い
- 4 暗褐色土 ローム粒、ブロック含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック多い
- 6 暗褐色土 白色粘土多い
- 7 暗褐色土 焼土ブロック層多い(カマド火床面)
- 8 暗褐色土 灰化物多い(掘り方)
- 9 黄褐色土 山砂を多量に含む

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 ローム粒少量

第46図 第16号住居跡



第47図 第16号住居跡出土遺物

第16表 第16号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	環	(13.0)	4.2	—	10	C・G・I	不良	淡褐	体部ヘラケズリ 北武蔵型環
2	土師器	環	12.6	3.9	—	75	C・H・I・K	良好	淡褐	№18(床+16) 底部手持ヘラケズリ
3	土師器	皿	(16.0)	2.5	—	20	C・E・G	普通	褐	№29(床+15) 北武蔵型皿 胎土粉っぽい
4	須恵器	環	(14.0)	3.8	11.0	30	C・E・K	良好	灰白	№31・33(床+24+30) 底部未切り後回転ヘラケズリ 南北企産か
5	須恵器	高台碗か	17.0	5.4	—	30	I・K	良好	灰白	№32(床+31) 産地不明(西毛産?) 体部下端ケズリ
6	土師器	甕	20.0	22.6	—	90	C・H・I・K	良好	橙	№1・2・3 一括(床+0~3) 胴部外面ヘラケズリ 粘土付着
7	土師器	甕	(22.4)	8.7	—	25	C・H・I・K	良好	橙褐	№4・12・17(床+19+28) 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面木口ナデ
8	土師器	甕	(20.8)	7.5	—	10	C・G	不良	橙褐	№5・6 体部ヘラケズリ 頸部に粘土接合痕
9	土師器	小型甕	13.9	7.1	—	60	C・G・H・I・K	良好	褐	№9・10・11(床+11~21) 胴部外面ヘラケズリ
10	土製品	羽口	№16(床+18)	長さ6.3cm	65.20g					外面は丁寧にナデを施しヘラケズリの圧痕を残す 多量のスガが混入する
11	土製品	土玉	最大径1.8×1.9cm	最大高1.5cm	孔径0.4~0.7cm	4.69g				穿孔がやや稚

が多量に含まれ、単純に自然堆積とは思われない状況が窺われた。

カマドは北西壁に設置されるが、燃焼部から煙道部にかけて第7号溝跡に削平されていた。右袖は遺存し、砂質の強い黄灰色から白色粘土で構築されていた。内面の側壁は被熱していた。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に設置されていた。不整形円プランで、規模は長径56cm、短径50cm、深さ22cmである。ピットは1本検出されたが、主柱穴にはならない可能性が高い。

壁溝は巡る。深さ2~13cm。

出土遺物は、土師器環・皿・甕・小型甕、須恵器環・碗、鞆羽口と土玉がある(第47図)。1・2は北武蔵型環。2は丸底で口縁直下まで削り込んでいる。3は北武蔵型の皿。4は須恵器大型環。底部回転(?) 糸切り後回転ヘラケズリ調整。白色針状物質は確認できないが、南北企産と推定しておく。5は体部下端に回転ヘラケズリ調整が入る。高台碗か。ざらつとした胎土で鉾物粒子が目立たない。黒色粒子が吹き出す。産地は不明だが西毛産と推定しておく。6~8は武蔵型甕。10は鞆羽口の基部付近。他に製鉄系の炉内滓(?) が745.44g検出された。

時期は7世紀末葉~8世紀初頭頃である。

第17号住居跡(第48図)

第17号住居跡は調査区南西端部のR-9・10、S-9グリッド、低地帯に移行する谷地形の斜面に位置する。第7号溝跡及び第1号土壌、第74号土

壌によって一部壊されているが、全体的な遺存状態は良好である。ちなみに、第1号土壌、第74号土壌ともに土師器焼成土の可能性がある。

平面形は整った方形で、規模は長軸長5.28m、短軸長5.15m、深さ0.41mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

床面は西から東、北から南、つまり谷地形に沿うように傾斜していた。二次的に沈降したものであるうか。カマド前面から反対側の壁に向かう中央付近が良く踏み固められていたが、壁際は比較的軟弱であった。南東壁直下の床面は被熱していた。

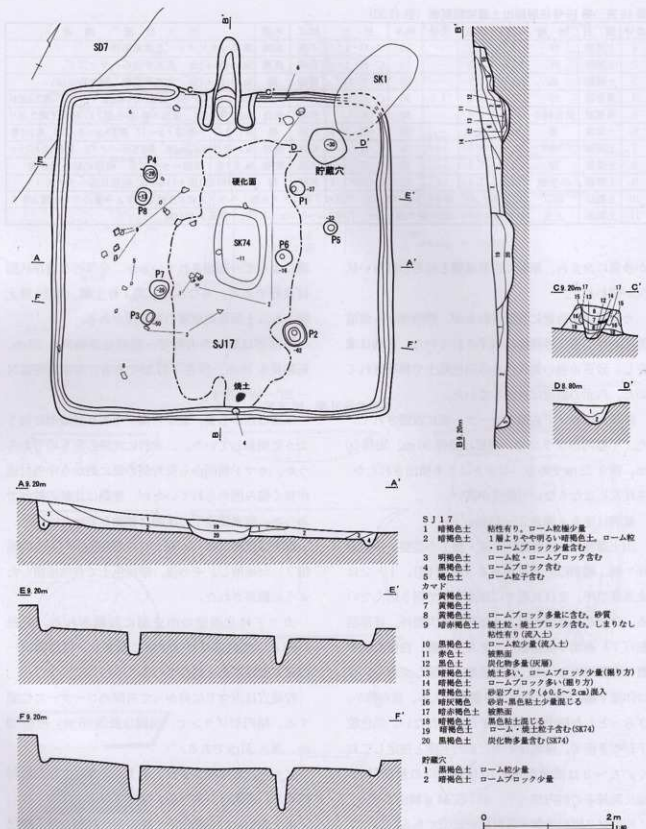
覆土は壁際にローム混じりの明褐色土(人為的堆積?) が堆積し、その後、暗褐色土で自然堆積したように観察された。

カマドは北西壁の中央部に設置される。全長1.50m、燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道部は一段高く壁外に長く延びている。

貯蔵穴はカマドに向かって右側のコーナーに位置する。略円形プランで、規模は長径56cm、短径50cm、深さ30cmである。

ピットは8本検出され、P1~P4は主柱穴に対応する。壁溝は全周する。深さ2~13cm。

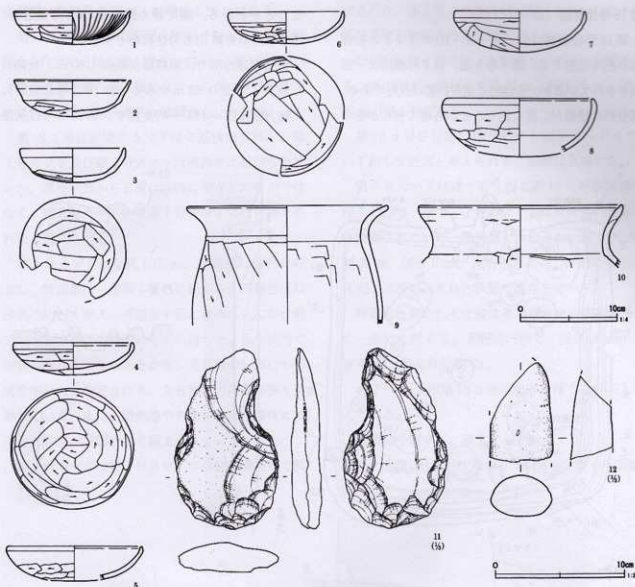
出土遺物は、土師器環・甕・壺、打製石斧、棒状礫がある(第49図)。1は北武蔵型暗文環で、内面に放射状暗文が施文される。覆土中と貯蔵穴内の破片が接合した。2は模倣環で、ほぼ床面から出土した。3~8は丸底形態の北武蔵型環で、口縁部は短く内



第48図 第17号住居跡

屈または内彎する。同タイプの中でも古い特徴を具備している。4は南東壁際から出土した完形品であ

る。7はほぼ床面出土。11は打製石斧で混入品。分銅型の基部が欠損している。刃部くびれの一部分



第49図 第17号住居跡出土遺物

第17表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土器	環	12.0	3.4	—	75	C・K	良好	褐	No.33 貯蔵穴(床直) 内面放射暗文
2	土器	環	(12.0)	3.8	—	40	C・I	普通	淡褐	No.12・19(床直) 体部ヘラケズリ
3	土器	環	10.8	3.5	—	80	C・G・H・I	良好	褐	No.20・25(床+0~19) 雲母状微粒子を含む
4	土器	環	12.2	3.3	—	100	C・G・H・I・L	良好	橙褐	No.21(床直) 厚い
5	土器	環	(13.8)	3.5	—	20	C・H・I・K	不良	褐	No.26(床+20) 器面全体に風化し磨耗 調整不明瞭
6	土器	環	11.8	3.2	—	75	C・H・I・K	良好	褐	No.11(床+21) 雲母状微粒子
7	土器	環	13.4	4.2	—	90	C・E・H・I・K	良好	橙褐	No.13(床直) 北武蔵型環
8	土器	環	(15.0)	5.5	—	25	C・H・I・K	普通	褐	No.22(床直) 体部外面磨耗顕著
9	土器	甕	(20.4)	12.2	—	50	C・G・H・I	良好	褐	No.8・28・31・32(床+0~14) 体部外面ヘラケズリ
10	土器	査	(21.0)	6.1	—	20	C・G・H・I	良好	褐	雲母状微粒子 体部外面ヘラケズリ
11	石製品	石杵	長さ13.8cm 幅8.0cm 厚さ2.3cm	253.16g	石材:ケルンフェルス	分銅型 基部欠損 刃部一部に使用による磨耗・光沢がみられる				
12	石製品	不明石製品	長さ7.5cm 幅4.7cm 厚さ3.2cm	142.97g	石材:砂岩					

使用(磨耗)痕が認められる。長さ13.8cm。12は
砂岩の棒状礫。

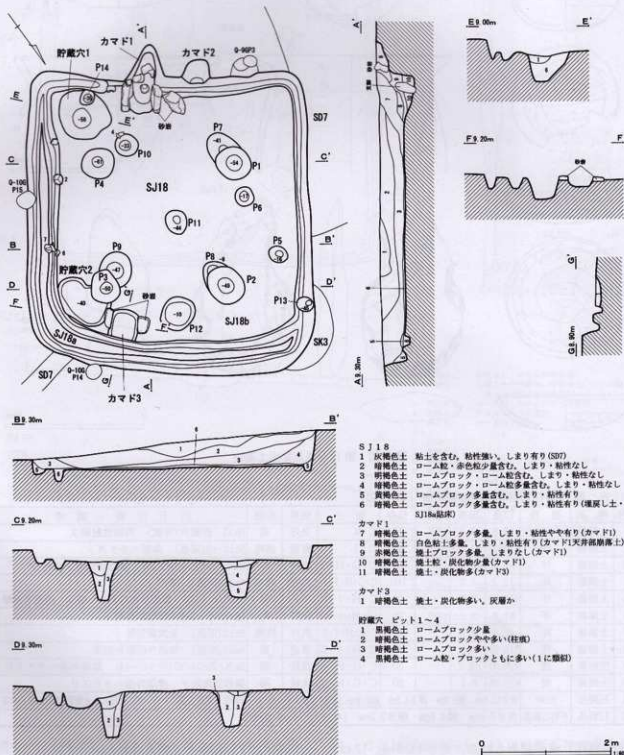
時期は7世紀後半と考えられる。

第18号住居跡 (第50・51図)

第18号住居跡はQ・R-9・10グリッドの谷部傾斜面に位置する。第3号土壌、第7号溝跡に一部削平されているが、全体的に遺存状態は良好である。部分的に壁溝が二重に巡ることから建て替えがあっ

たことがわかる。建て替え後を第18 a号住居跡、
建て替え前を第18 b号住居跡とする。

平面形は方形で、規模は長軸長 4.60 m、短軸長 4.38 m、深さ 0.53 m である（第 18 a 号住居跡）。主軸方位は N-143°-W を指す。第 18 b 号住居跡



第50图 第18号住居跡

の規模は長軸長4.21 m、短軸長4.08 mである。

第18 a号住居跡の床面は平坦である。カマド前面から住居中央部は硬く締まっていた。覆土は第2・3層が自然堆積、第4層にはロームブロックが多く含まれ、あるいは人為的な堆積かもしれない。

第18 a号住居跡のカマドは2基検出された。第1号カマド及び第2号カマドは南西壁に設けられていた。遺存状態から2基は同時に並存したものではなく、第2号カマドから第1号カマドに付け替えられたと考えられる。

第1号カマドは全長1.05 m、燃焼部は壁内に収まり、煙道部は一段高く壁外に延びる。両袖部には砂岩の切石を据え、煙道部手前には落ち込んだ状態で、左右の袖部の外側にみずれ落ちたような状況で砂岩の塊が出土したことから、天井部の一部にも砂岩を用いたと推定される。左右袖石の内壁は強く被熱していた。また、燃焼部やや奥寄りには棒状に加工した砂岩が支脚として据えられていた。

第2号カマドは第1号カマドの西側に隣接して検

出された。第1号カマドに付け替えられたため、燃焼部奥壁が検出されたに留まる。

貯蔵穴は第1号カマド左側のコーナーに設置される。略円形で、規模は長径77 cm、短径75 cm、深さ56 cm (第1号貯蔵穴)。

第18 a号住居跡に伴うピットはP1～P4で、いずれも主柱穴と考えられる。壁溝は全周する。

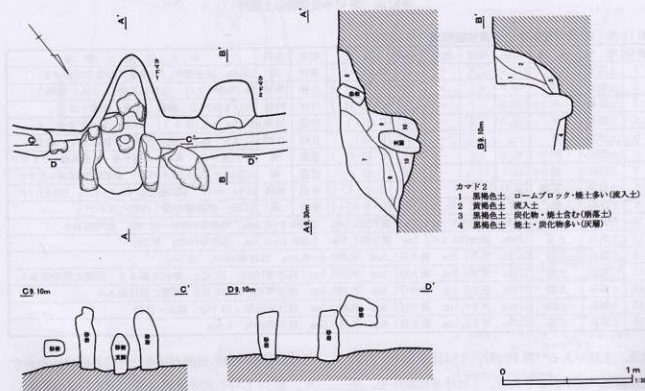
第3号カマドは建て替え前の第18 b号住居跡に伴うもので、第1・2号カマドとは反対側の北東壁に設置されていた。燃焼部のみ残存し、長さ42 cm、幅40 cm、深さ10 cm。左右袖部には、砂岩の平石が床面下に埋め込まれた状態で遺存していた。

貯蔵穴と思われる土壌は第3号カマド東隣のコーナー部に位置する。不整楕円形で、長さ90 cm、深さ40 cm (第2号貯蔵穴)。

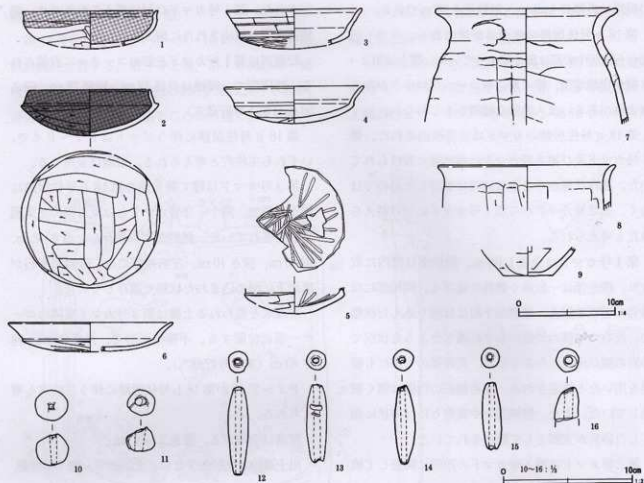
P7～P10が第18 b号住居跡に伴う主柱穴と考えられる。

壁溝は全周する。深さ2～7 cm。

出土遺物は比較的少ない。土師器坏・甕・小型甕、



第51図 第18号住居跡・第1・2号カマド



第52図 第18号住居跡出土遺物

第18表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	環	(13.8)	3.6	—	20	G・H・I・J・L	良好	褐	SJ18a 比企型環 口縁部外面及び内面赤彩
2	土師器	環	12.4	4.7	—	95	C・G・H・I	良好	黒褐	№2 (床+7.5) 内外面黒塗(くすんだ暗褐色)
3	土師器	環	(13.9)	3.7	—	30	C・G・H・I	良好	明褐	SJ18b 貯穴2 無彩 沈線 体部ミガキ
4	土師器	環	(14.3)	3.8	—	40	C・G・I	普通	淡褐	SJ18a №5 (床+7) 体部ヘラケズリ
5	土師器	環	—	2.7	—	60	E・G	良好	赤褐	SJ18a 体部外面ヘラケズリ後ミガキ 暗文
6	土師器	環	(16.8)	3.0	—	10	C・G・H・I	普通	褐	№4 (床+5) 無彩 内面平滑 体部外面ヘラケズリ
7	土師器	甕	18.6	12.0	—	20	C・G	普通	褐	SJ18a カマド №3 (床+5~16) 胴部縦方向に弱いケズリ
8	土師器	小型甕	(18.0)	4.7	—	25	C・I・K・L	普通	淡褐	SJ18a カマド 体部外面光沢のあるヘラケズリ 内面木口ナデ
9	土師器	甕	—	3.0 (5.1)	10	10	D・E・G・I	普通	褐	SJ18a 外面煤付着 内面ヘラナゲ
10	土製品	土玉	SJ18a	最大径2.3×2.6cm	最大高2.5cm	孔径0.4~0.6cm	残存率100%	12.98g	使用痕あり	
11	土製品	土玉	SJ18a	最大径2.0×2.2cm	最大高1.9cm	孔径0.5~0.7cm	残存率100%	5.28g		
12	土製品	土錘	SJ18a	長さ6.8cm	最大径1.5cm	孔径0.4~0.6cm	残存率100%	15.67g		
13	土製品	土錘	SJ18a	長さ6.0cm	最大径1.5cm	孔径0.5cm	残存率100%	13.63g	棒状圧痕あり 両端に使用痕あり	
14	土製品	土錘	SJ18a	長さ6.1cm	最大径1.6cm	孔径0.5cm	残存率100%	14.22g	両端に使用痕あり	
15	土製品	土錘	SJ18a	長さ6.1cm	最大径1.4cm	孔径0.3cm	残存率95%	10.73g	裏面一部剥	
16	土製品	土錘	SJ18a	長さ2.5cm	最大径1.8cm	孔径0.6cm	残存率40%	6.60g		

土玉、土錘がある(第52図)。1は比企型環。内面と口縁部外面が赤彩される。2は坏身模倣環で、全面黒色処理される。第18a号住居跡覆土下層出土。

3は口縁部中程に沈線が巡る。体部外面はヘラミガキ。第18b号住居跡2号貯蔵穴出土。4は細かい白色粒子を多量に含むややざらついた胎土の模倣環。

5は口縁を欠くが模倣坏と思われる。内面にやや太目の工具で暗文が施される。体部外面はヘラズリ後、粗いミガキが施されている。6も4同様に大きく開く皿状の坏。体部外面はヘラズリ後、一部棒状工具のミガキ痕が観察される。7は口縁部直下に無調整部が残る。胴部は縦方向のヘラズリ。8は小型壺。胴部外面木口状の工具で縦方向に撫でている。光沢があり、ミガキ風に見える。10・11は土玉、12～16は管状土鍾である。他に製錬系炉内滓141.19gが出土しているが、混入と思われる。

時期は6世紀後半と推定される。

第19号住居跡 (第53図)

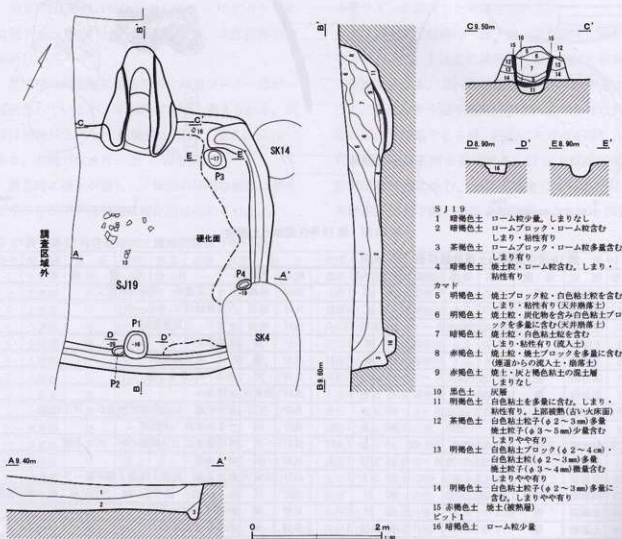
第19号住居跡はP-9、Q-9・10グリッドに位置する。西壁部は調査区外に延びているため、全

容は不明である。第25号住居跡が壁を接する位置にあるが、本住居跡の方が新しい。第14号土壌との関係は不明確であるが、やはり本住居跡が新しい可能性が高い。南東コーナー部には第4号土壌が重複する。第4号土壌は土師器焼成土であるが、住居床面の遺存状況から第4号土壌の方が新しいと判断した。

平面形は方形系と考えられる。残存規模は長軸長4.00m、短軸長3.05m、深さ0.58mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、壁際を除き全体的に硬く踏み固められていた。覆土は暗褐色土を主体に堆積しており、概ね自然堆積と判断した。

カマドは北壁に設置される。全長1.68m、燃焼

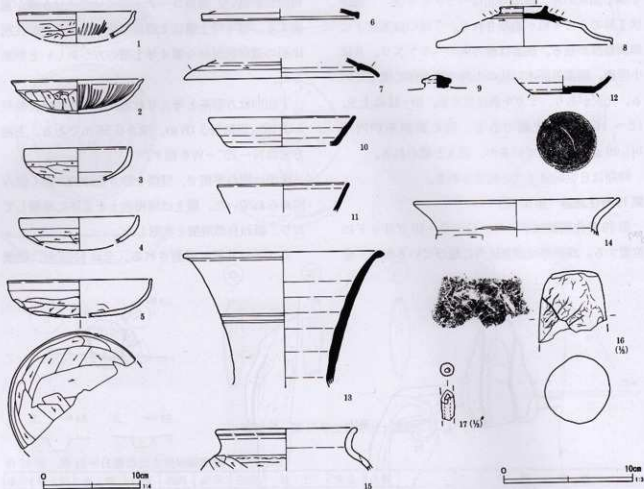


第53図 第19号住居跡

部は壁を切り込んで構築されていた。袖部及び天井部は白色粘土を用いて構築され、内壁は強く被熱していた。底面（掘り方）も一部被熱し、その上面に

灰層が形成されていた。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは4本検出されたが、主柱穴ではない。



第54図 第19号住居跡出土遺物

第19表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(12.2)	2.7	—	10	G・I	良好	淡褐	カマド灰層中 内面放射暗文
2	土師器	坏	(13.6)	3.5	—	35	C・E・I	良好	暗褐	内面放射暗文(中心→外)
3	土師器	坏	(10.8)	3.4	—	20	C・D	良好	淡褐	カマド 北武蔵型坏
4	土師器	坏	(12.2)	2.8	—	20	C・I	良好	褐	北武蔵型坏
5	土師器	坏	14.8	3.8	—	50	C・E・I	良好	褐	貯穴 北武蔵型坏
6	須恵器	蓋	(16.0)	1.0	—	10	I・K	良好	灰	産地不明(東金子産)?
7	須恵器	蓋	(20.0)	1.9	—	5	I・K	良好	淡青灰	末野産か
8	須恵器	蓋	—	1.7	—	60	J	良好	灰白	高台状鈕 佐波理模倣轆蓋か 南比企産
9	須恵器	蓋	—	1.3	—	100	B・I・L	良好	灰	つまみ完存 末野産
10	須恵器	坏	(15.0)	3.0	(10.4)	15	I・J・K	良好	灰	外面降灰により調整不明 南比企産
11	須恵器	坏	(13.5)	3.0	—	15	D・I・J	良好	灰	南比企産
12	須恵器	坏	—	1.8	6.0	70	I・J	良好	淡青灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ
13	須恵器	広口瓶	20.0	13.9	—	90	I	良好	灰	No.1(床直) 緑帯風口縁 外面沈線二条 南比企産
14	土師器	壺	(21.0)	3.8	—	20	I・K	良好	褐	胴部横方向ケズリ
15	土師器	壺	(14.0)	4.5	—	20	C・I	良好	褐	胴部接合痕あり
16	土製品	支脚	カマド	No.16	長さ5.3cm	径5.1~5.2cm	115.40g	胎土に角四石、赤色・白色粒子含む	木葉痕あり	
17	土製品	土師	長さ2.3cm	最大径1.0cm	孔径0.4cm	残存率40%	1.88g			

壁溝は東壁から南壁にかけて巡っていた。深さ4～8cm。

出土遺物は土師器・甕、須恵器・蓋・長頸瓶、土製支脚、管状土鋸がある(第54図)。1・2は北武蔵型暗文環で、内面に放射暗文が施文される。3～5は北武蔵型環。丸底であるが、扁平化している。6～9は須恵器蓋。8は佐波模倣椀蓋と思われる。10～12は須恵器環。12は混入か。13は縁帯をもつ広口の長頸瓶と思われる。南比企産。14は武蔵型甕と思われる。16は土製支脚で、側面に木葉痕(葉脈)が刻まれている。他に腕形片が1点、108.01gある。

時期は8世紀前半(1/4期～2/4期)と考えられる。

第20号住居跡(第55図)

第20号住居跡は低地帯のQ・R-10グリッドに位置する。第21号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

低地帯の斜面地にあるために南東コーナー部が一部流失しているが、平面形は方形と考えられる。規模は長軸長3.96m、短軸長3.72m、深さ0.52mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

調査時に湧水が激しく、床面の詳細な観察はできなかったが中央部付近に硬化面は認められた。

覆土は黒味の強い色調で、炭化物や焼土粒子の混入が目立った。

カマドは北西壁に設置されていた。全長1.08m、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。袖部は白色粘土を用いてつくられ、内壁部は被熱していた。カマド西側の壁面が強く被熱していたため、更に1基カマドの存在を疑ったが、重複する第21号住居跡に伴う焼土の可能性が高いと判断した。

貯蔵穴はカマド右脇に検出された。円形で、規模は長径59cm、短径55cm、深さ12cmである。

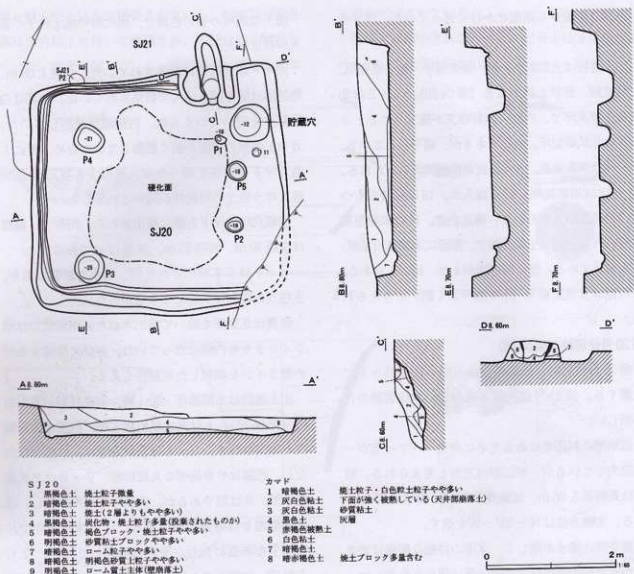
ビットは5本検出されたが、湧水の影響もあり、主柱穴の存在は明確にできなかった。

壁溝は北東壁を除いて検出された。南東壁では壁ラインよりも内側に巡っていた。谷部に位置するため壁ラインを誤認した可能性もある。

出土遺物は土師器・皿・甕、須恵器・蓋がある(第56図)。1は北武蔵型暗文環。内面に放射暗文が施文される。2～6は北武蔵型環。口縁部は直立し、底部はやや扁平な丸底形。7・8は北武蔵型の皿。9は皿であるが、内面にミガキを施し、北武蔵型皿とは系譜を異にする。11は末野産環で片岩粒子を多量に含む。全体に風化している。12も末野産。体部下端と底部全面回転ヘラケズリ調整。

第20表 第20号住居跡出土遺物観察表(第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	環	(12.0)	3.4	—	20	C・I	良好	橙褐	内面放射暗文
2	土師器	環	(11.8)	3.0	—	30	C・G・I	良好	褐	北武蔵型環
3	土師器	環	(11.6)	2.9	—	20	C・I	良好	褐	北武蔵型環
4	土師器	環	(13.4)	3.7	—	25	C・I・K	良好	淡褐	カマド 北武蔵型環 内面風化 指頭痕
5	土師器	環	(15.8)	4.3	—	15	C	良好	褐	北武蔵型環
6	土師器	環	(16.8)	4.0	—	10	C	良好	褐	北武蔵型環
7	土師器	皿	(16.0)	3.6	—	15	C・I	良好	橙褐	カマド 北武蔵型皿 内面風化
8	土師器	皿	(17.7)	3.7	—	20	C・E・H・I	不良	橙褐	北武蔵型皿 やや風化
9	土師器	皿	(18.6)	3.2	—	45	C・D・K	良好	明褐	カマド 南関東(武蔵南部系)か 内面ミガキ
10	須恵器	蓋	—	2.0	—	25	I・J・K	良好	灰白	南比企産 環状ツマミ(径5.0)
11	須恵器	環	14.0	3.8	10.3	95	B・C・D・H・I・L	不良	褐灰	山1(床+7.5) 表面風化が激しい 末野産 口縁部に沈線2条
12	須恵器	環	15.2	4.2	9.8	40	B・E・I	良好	暗灰	末野産 体部下端及び底部回転ヘラケズリ
13	須恵器	環	18.6	6.0	14.5	60	D・H・I・J	良好	淡褐	産地不明 底部全面回転ヘラケズリ ロクロ右回転
14	須恵器	環	—	1.4	(10.0)	30	I・J・K	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 中心部系切り直
15	土師器	甕	(20.4)	9.3	—	20	K	良好	褐	体部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ 口縁部指頭痕
16	土師器	甕	23.3	30.7	—	50	C・G・H・I・K	良好	淡褐	胴部外面ヘラケズリ
17	土師器	甕	(22.8)	29.7	—	35	C・G・H・I・K	良好	褐	胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
18	土師器	甕	—	1.5	(6.0)	60	C・H・I	普通	暗褐	カマド 外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ



第55図 第20号住居跡

13は口径18cmの大型環。胎土肌理細かく形態整う。底部は全面回転ヘラケズリ調整。産地不明。15～17は武蔵型甕。他に覆土中から炉内滓が90.74g出土した。

時期は8世紀初頭頃(1/4期)と考えられる。

第21号住居跡(第57図)

第21号住居跡はQ-10グリッドに位置する。重複する第20号住居跡に南東壁付近を削平され、覆土上面は第7号溝跡の攪乱を受けていた。

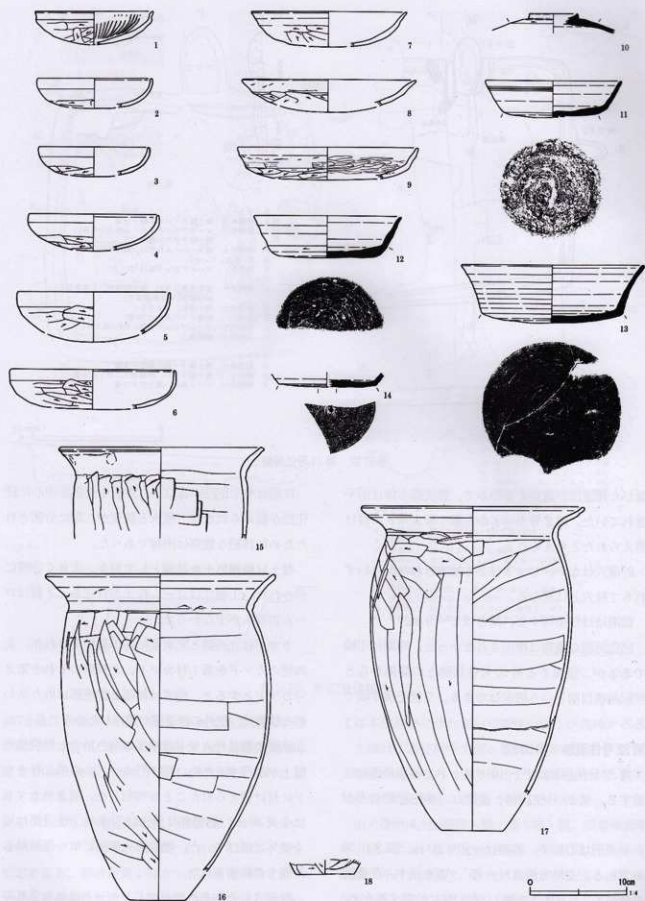
平面形は不整形(台形)と推定される。規模は長軸長3.90m、短軸長3.60m、深さ0.29mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面は地形の傾斜に沿うように南東方向に若干下っていた。カマド前面から住居中央付近が比較的硬く踏み固められていた。また、第20号住居跡カマドの西側の床面には被熱した焼土が認められたが、性格は明らかにできなかった。

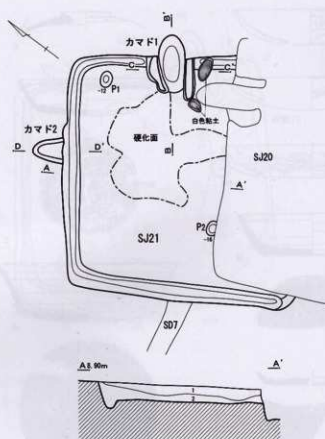
覆土は黒味が強く、下層に焼土粒子とローム粒子の混入が目立った。

カマドは2基検出された。第1号カマドは北東壁に設けられていた。燃燒部は壁をやや切り込んで構築され、全長90cm。袖部には白色粘土が用いられ、周囲にも白色粘土ブロックが残されていた。

第2号カマドは北西壁につくられていた。壁外に



第56圖 第20号住居跡出土遺物



SJ21

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多い
- 3 暗褐色土 焼土・ローム粒含む、粘性有り
- 4 床(硬化している)
- 5 褐色土 ロームブロック含む(掘り方)
- カマド1
- 6 暗褐色土 砂を多量に含む、焼土粒含む、しまりなし
粘性有り(天井部崩落土)
- 7 赤褐色土 焼土含む、しまりなし
- 8 黒色土 灰黒じりの黒色土(灰層)
- 9 暗褐色土 ロームブロック大量に含む(掘り方)
- 10 白色粘土 袖部土

カマド2

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 2 褐色土 焼土粒子多い、砂質粘土ブロック少量
- 3 明褐色土 ローム多い、焼土粒子少量



第57図 第21号住居跡

延びた煙道部が遺存するのみで、燃焼部本体は削平されていた。第2号カマドから第1号カマドに付け替えられたと考えられる。

貯蔵穴はない。ピットは2本検出されたが、いずれも主柱穴とは異なる。

壁溝はほぼ全周する。深さは2～9cm。

図化可能な遺物は検出されなかった。時期は不明であるが、重複する第20号住居跡との関係から8世紀初頭以前という限定はできる。7世紀後半頃であらうか。

第22号住居跡 (第58図)

第22号住居跡はP-10グリッド、谷部斜面に位置する。第23号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

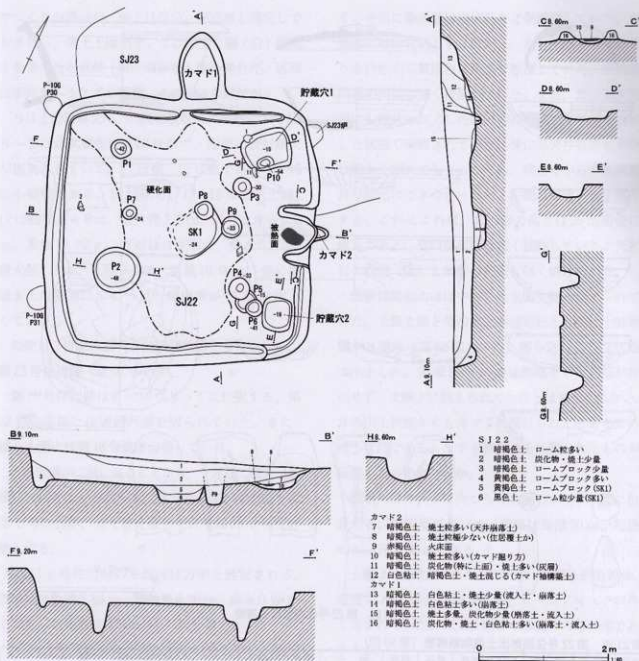
平面形は方形で、規模は一辺4.20m、深さ0.54mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。住居跡の西側2/3がB区、東側1/3がC区に位置するため、分割調査となった。

床面はやや凹凸が目立つ。住居中央部を中心に硬化面が認められたが、湧水と調査が二期に分割されたために詳細な観察は困難であった。

覆土は暗褐色土を基調としており、大きく2層に分かれた。上層にはローム粒子が目立ち、下層はロームの混入が少なかった。

カマドは北西壁と北東壁に各1基検出された。北西壁のカマドを第1号カマド、北東壁のそれを第2号カマドとすると、前者は袖部と燃焼部は取り払われた状態で、壁外の煙道部が遺存したのみであった。北東壁の第2号カマドは袖部の白色粘土と燃焼部堆積土が遺存するため、第1号カマドから第2号カマドに付け替えられたことが判明した。第2号カマドは全長80cm、燃焼部は壁内に収まり、煙道部は短く壁外に延びていた。燃焼部火床面には一部被熱した焼土が観察された。

貯蔵穴もそれぞれのカマドとセットになり2基存在する。第1号貯蔵穴は隅丸長方形で、規模は長軸



第58図 第22号住居跡

長75 cm、短軸長58 cm、深さ15 cmである。第2号貯蔵穴は方形で、規模は長軸長52 cm、短軸長45 cm、深さ18 cmである。カマドと共に付け替えられたと考えられる。

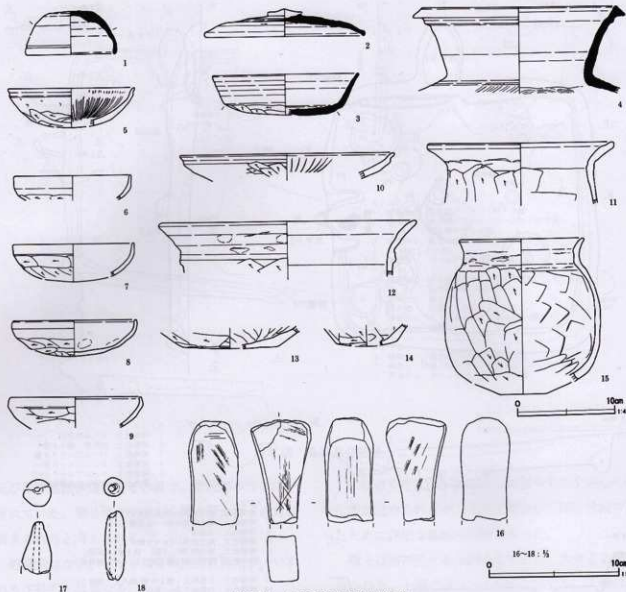
ピットは9本検出された。主柱穴はP1～P4のセットとP1・P2、P10・P6の4本セットを想定できる。前者が第1号カマド、後者が第2号カマドとそれぞれ対応し、同位置での建て替えがあったものと考えておきたい。P7・P8・P9につい

ては本住居跡に伴わない可能性のほうが高い。

土壌は1基住居中央部から検出された(SK1)。

壁溝は北東壁の一部で検出できなかったが、本来は全周したと推定される。深さ2～6 cm。

出土遺物は土師器・環・皿・甕・壺・甔、須恵器蓋・環・壺、砥石、管状土鍾がある(第59図)。1は須恵器「環H」の蓋で、外面に沈線が1条巡る。天井部は回転ヘラケズリ調整。湖西産である。2は無かえりの蓋。つまみは剥落しており、形状は不明。や



第59図 第22号住居跡出土遺物

第21表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

表 22 考古館山出土物表 (第 39 頁)										
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	(8.9)	4.4	—	50	G・K	良好	灰	№4 (床+30) 湖西産 坏H蓋 回転ヘラケズリ
2	須恵器	蓋	(16.2)	2.3	—	50	E・G・I・K	良好	灰白	№1 (床+47) 湖西産か ツマミ欠失 ロクロ右回転
3	須恵器	坏	15.0	4.2	12.0	75	A・E・H・I	不良	灰白	カマド 新治産 底部手持ちヘラケズリ やや風化
4	須恵器	壺	(20.0)	9.0	—	20	D・K	良好	灰	№6 (床+15) 末野産か 胴部平行叩き・同心円文当て具
5	土師器	坏	(13.0)	3.9	—	20	D・K	良好	明褐	カマド 北武蔵型暗文坏 内面放射状暗文
6	土師器	坏	(12.4)	2.5	—	25	C・I	普通	橙褐	北武蔵型 風化
7	土師器	坏	12.3	3.4	—	50	C・I	良好	褐	カマド 北武蔵型 体部手持ちヘラケズリ
8	土師器	坏	(12.8)	3.7	—	55	C・H	普通	褐	北武蔵型 体部手持ちヘラケズリ 内面あばたに風化
9	土師器	坏	(13.5)	3.2	—	15	K	良好	褐	カマド 北武蔵型 黒斑あり
10	土師器	皿	(22.0)	2.7	—	10	C・E・I	良好	褐	内面放射暗文 器壁厚い
11	土師器	甕	(18.8)	6.5	—	45	C・I	良好	淡褐	№5 (床直) 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
12	土師器	甕	(26.0)	5.8	—	20	C・E・I	良好	橙褐	胴部外面ヘラケズリ 頸部外面指頭痕
13	土師器	壺	—	2.3 (9.8)	25	C・K	良好	褐	カマド	胴部外面ヘラケズリ 内面指ナデ
14	土師器	甕	—	2.2 (6.2)	20	C・H・I・K	良好	明褐	カマド2	二次被熱を受ける
15	土師器	小型甕	(12.7)	14.7	—	35	C・I・K	良好	褐	貯穴 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
16	石製品	砥石	長さ7.9cm	幅4.6cm	厚さ3.4cm	156.18g	安山岩	正面・中央が凹む	正面に鋭い条線	

やつくりが悪いが、胎土は良い。湖西産と推定しておきたい。覆土上層出土。3は胎土に銀(白)雲母を多量に含む常陸(新治窯跡群)産の無台坏。底部は手持ちへうケズリ調整。4の壺は末野産か。

5は土師器暗文坏。内面に放射暗文が施文される。6~9は北武蔵型坏。10は皿で、内面に放射暗文が施文されている。11は甕、12は甕であろう。15は小型甕である。16は砥石。17・18は管状土鍾。17は残存長4.0cm、最大径2.2cm、孔径0.4~0.5cm。重量10.72g。18はほぼ完形で、長さ5.3cm、最大径1.5cm、孔径0.5cm。重量10.66g。他に炉壁または甕羽口片4.15g、炉内滓が75.83g出土している。

時期は7世紀末葉~8世紀初頭頃と考えられる。

第23号住居跡(第60・61図)

第23号住居跡はP-10グリッドに位置する。第22号住居跡に住居南西部を切られていた。また、覆土上面には第18号溝跡が乗っていた。

一部壁溝が二重に巡ることから、一度建て替え(拡張)されたことがわかる。建て替え前の住居跡を第23b号住居跡、建て替え後のそれを第23a号住居跡とする。

第23a号住居跡の平面形は方形と推定される。規模は長軸長5.64m、短軸長4.90m、深さ0.28mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。

第23b号住居跡は平面形横長の長方形で、規模は長軸長5.13m、短軸長4.08mである。

床面はやや起伏が顕著である。覆土はロームブロックや焼土粒子・炭化物粒子が多く含まれ、人為的に埋め戻された状況が認められた。また、床面上には3ヵ所に炉跡が検出された。皿状に窪み底面が焼けていた。性格は不明である。

カマドは北西壁に設置されていた。燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道部は、壁外斜め上方に立ち上がる。全長1.26m、焚口部幅0.60mである。

非常に遺存状態の良いカマドで、左袖部には奥に底部を欠いた土師器長甕(第62図9)を正位に据え、

その手前に凝灰質砂岩切片を2個設置していた。右袖部には砂岩切片を3個据え、左右袖部ともその周りを白色から黄灰色の粘土で被覆していた。燃焼部内側の側壁は強く被熱していた。また、焚口部天井部にも板状に加工した砂岩切片が、左右袖部を連結した状態で架橋されていた。焚口部天井石の右半分は細かく割れてしまったため、残念ながら写真撮影及び図化はできなかったが、左側は原形のまま遺存する。これによれば、焚口部の高さは25cm前後に復元できる。焚口部底面は強く被熱していた。天井石の内壁(面)と奥側の側壁も強く焼けていた。

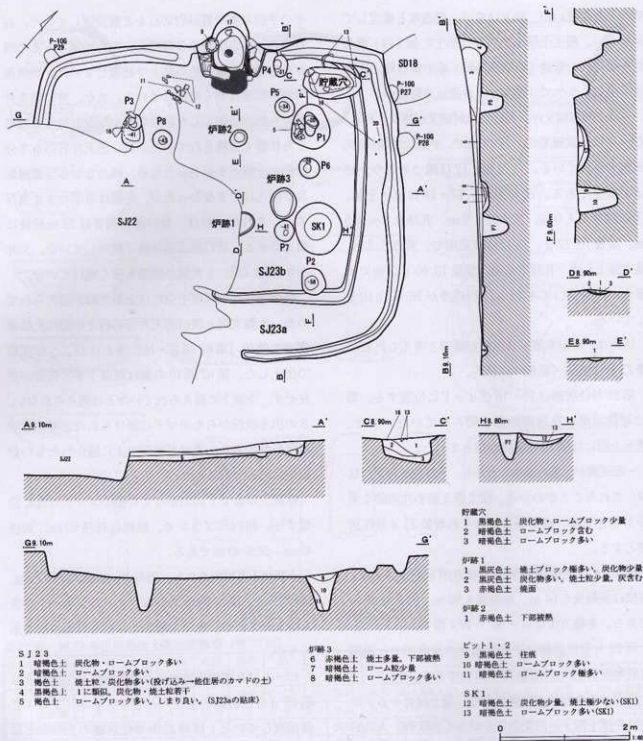
燃焼部底面のほぼ中央には土製支脚が据えられていた。土製支脚と焚口部天井部切片との間に土師器甕が2個体(第62図8・10)落ち込むような状態で出土した。第62図10の甕は胴部下半と底部が存在せず、支脚上に据えられていたとは考えられない。8の出土状況からもカマドに掛けられたと考えるのは不自然である。カマド袖部の上に置かれたものが転落したのであろうか。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇のコーナー部に位置する。楕円形プランで、規模は長径90cm、短径49cm、深さ40cmである。

土壌は1基検出された。円形で、規模は長径79cm、短径72cm、深さ20cmである。ロームブロックが多く含まれていた。床下土壌または掘り方の一部であらうか。

ピットは8基検出された。位置的にP1~P3は第23a号住居跡の主柱穴、P5・P7・P3(2個重複している)は第23b号住居跡の主柱穴と思われる。また、重複する第22号住居跡P9は第23a号住居跡、P8は第23b号住居跡のそれぞれ主柱穴を構成する可能性が高い。

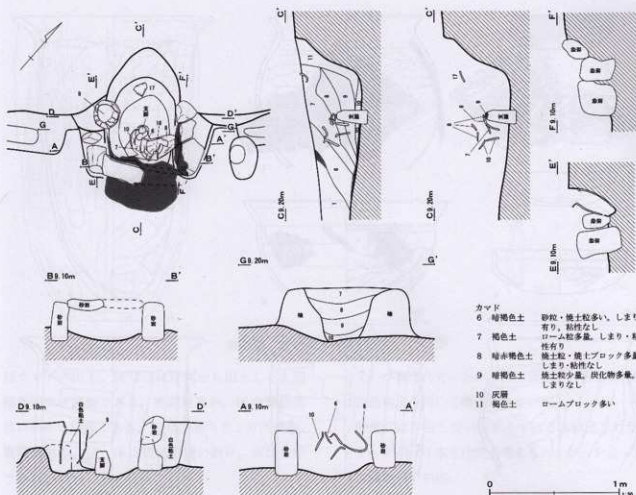
壁溝は本来全周していたのであろうが、第23a号住居跡南東壁西側が途切れていた。深さは5~10cm前後である。第23b号住居跡のそれは北東・南東壁部が検出された。北西・南西壁は第23a号住居跡と共通である。やや幅狭く深さは4~9cm。



第60図 第23号住居跡

出土遺物は土師器杯・甕、小型甕、須恵器甕、管状土錘、土玉がある(第62・63図)。1は統比企型の模倣杯である。内面と口縁部外面は赤彩される。覆土出土。2は模倣杯。口縁部は小さく立ち上がる。3も模倣杯。接合しない2片を合成図化。4は模倣杯と思われるが、系統が良くわからない。

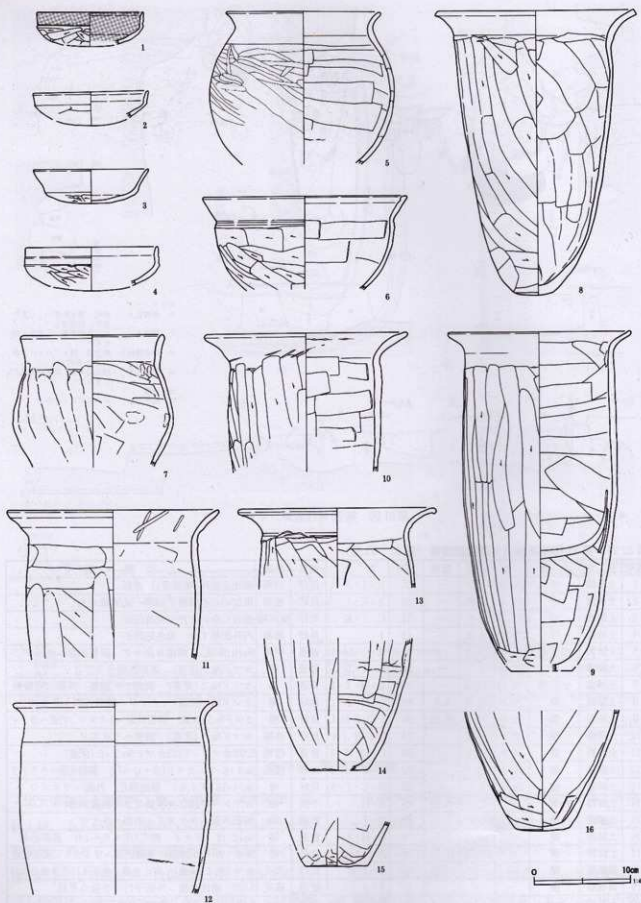
5の小型甕は外面二次被熱を受けている。床面出土。6の鉢と7の小型甕は注記ナンバーが同一。カマド内で、第62図10の甕の中から出土した。8は第62図10の甕の上部から出土した。9の甕はカマド左袖に埋め込まれた状態で出土した。10の甕はカマド内、支脚からややずれるように出土した。11



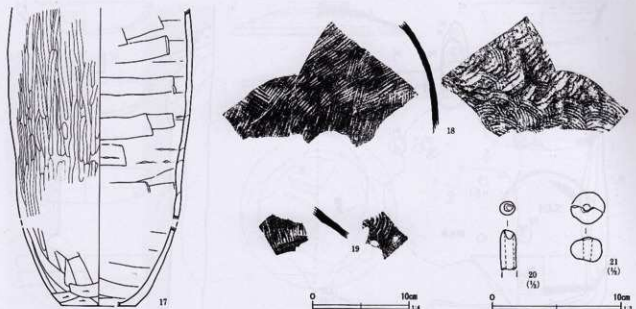
第61図 第23号住居跡カマド

第22表 第23号住居跡出土遺物観察表 (第62・63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(10.8)	3.3	—	25	E・I・J	良好	明褐	桃比金型坏(模微坏) 赤彩
2	土師器	坏	(11.8)	2.7	—	10	A・E・I	良好	橙褐	風化のため調整不明瞭 北武蔵の土
3	土師器	坏	(11.7)	3.5	—	35	C・I・K	良好	淡灰褐	接合しない2片を合成図化
4	土師器	坏	(13.4)	4.0	—	15	I	良好	黒褐	内外面黒ずむ 黒色処理か
5	土師器	小型甕	15.8	15.8	—	60	E・G・H・L	普通	明褐	Na10(床直) 胴部外面ナデ 胴部内面ヘラナデ
6	土師器	鉢	(20.8)	9.7	—	30	C・I・L	普通	褐	カマドNa2(床直) 体部外面ヘラズリ
7	土師器	小型甕	(14.5)	13.6	—	30	E・H・I・L	普通	褐	カマドNa2(床直) 胴部ナデ調整 外面二次被熱
8	土師器	甕	20.2	29.4	4.0	80	G・H・I・L	良好	褐	カマドNa1(床直) カマド 胴部外面ヘラズリ
9	土師器	甕	18.6	34.9	(6.3)	90	C・D・E・H・L	良好	褐	カマドNa5(床直) 体部外面ヘラズリ 内面ヘラナデ
10	土師器	甕	20.5	19.2	—	75	C・G・H・I・K	良好	淡褐	カマドNa3(床直) 胴部ヘラズリ
11	土師器	甕	21.8	15.4	—	30	C・G・H・I	普通	橙褐	SJ22カマド SJ23カマドNa3・6(床直)
12	土師器	甕	(20.4)	19.7	—	30	C・E・H・I	良好	橙褐	Na4・8・9 カマド(床+0~11) 胴部外面ヘラナデ?
13	土師器	甕	20.0	8.3	—	65	D・E・I・K	良好	褐	Na11・13(床+4) 器面風化 外面ヘラズリ
14	土師器	甕	—	13.5	(5.8)	15	E・H	不良	褐	カマド 外面二次被熱により器面剥落
15	土師器	甕	—	4.9	6.5	30	C・I	普通	褐	胴部外面ヘラズリ 内面ヘラナデ
16	土師器	甕	—	12.4	5.6	70	C・H・I	普通	褐	Na12・18 カマド 野穴(床+0~14) 底部砂底
17	土師器	甕	—	(30.5)	(7.6)	10	A・E・H・I	良好	褐	Na4 カマド(床直) 胴部外面ヘラミガキ 図上復元
18	須恵器	甕	—	—	—	5	I・J	良好	淡灰	カマドNa1(床直) 南比企産 外面平行叩き後カキ目
19	須恵器	甕	—	—	—	5	I・J	普通	淡灰	SJ22 南比企産 外面平行叩き後カキ目
20	土製品	土鍾	Na17(床+14)	長さ3.0cm	最大径1.2cm	厚さ1.1cm	孔径0.5~0.7cm	残存率60%	3.52g	
21	土製品	土玉	最大径(1.4~2.4)cm	最大高1.9cm	残存50%	孔径0.5~0.7cm	4.46g			



第62図 第23号住居跡出土遺物 (1)



第63図 第23号住居跡出土遺物(2)

はカマド内出土。12はほぼ床面から出土した。胴部外面ナデ調整である。東関東系か。16の甕底部はいわゆる砂底である。17は胴部ヘラミガキ調整。東関東系か。18・19は須恵器甕の破片。南比企産である。

土師器環1・2は重複する第22号住居跡に伴う可能性がある。3の模倣坏と8・9の土師器甕から、住居跡の時期は7世紀前半頃と推定しておきたい。

第24号住居跡(第64図)

第24号住居跡はP-9・10グリッド、谷部に移行する緩斜面に位置する。南東側に重複する第25号住居跡を切って構築され、東壁部は擾乱によって大きく抉られていた。

平面形は方形で、規模は長軸長4.44m、短軸長3.96m、深さ0.68mである。主軸方位はN-5°-Wを指す。

床面は平坦で、カマド前面から中央部にかけてよく踏み固められていたが、東西壁際はやや軟弱であった。覆土は第1・3層中にロームブロックなどが多く含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北壁中央に設置される。全長1.38mで、燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道部は壁外に斜め上方に立ち上がる。煙道部に2本の小ピット(P6・

P7)が穿たれていたが、性格は不明である。袖部は白色粘土を用いて構築されていた。

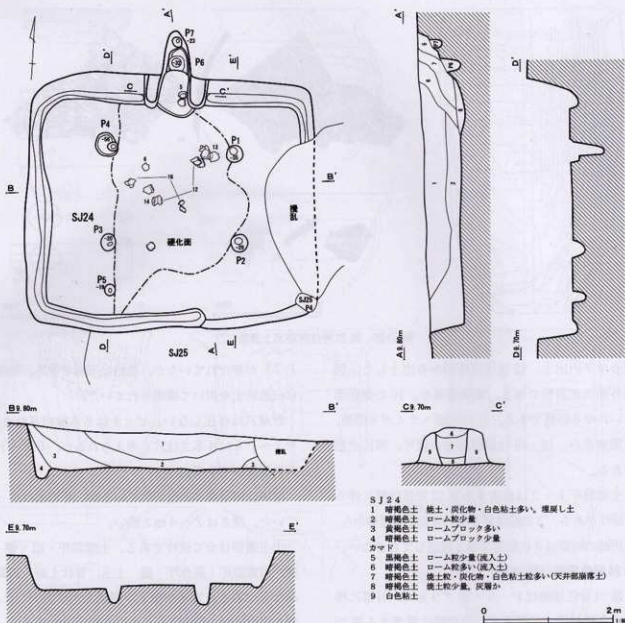
貯蔵穴は存在しない。ピットは5本検出された。P1~P4は4本主柱穴と考えられるが、P2・P3の深度がやや浅い。

壁溝は南壁東半が途切れているが、その他は巡っていた。深さは2~4cmと浅い。

出土遺物は全て破片である。土師器環・皿・甕・壺、須恵器環・高台環・蓋、土玉、管状土錘、石製品などがある。大半が覆土中層以上から出土した。埋め戻す過程で投棄されたものと推定される。

1・2は北武蔵型で、扁平化した丸底形態である。3・4は模倣(有段口縁)環。混入の可能性が高い。5は北武蔵系の皿である。カマド内ではあるが、かなり浮いた状態で出土。

6は環状つまみの須恵器蓋。南比企産。8は胎土から湖西産の高台環と考えられる。いわゆる出尻タイプとなろう。7も湖西産と推定され、8と同様の可能性がある。9・10は南比企産の須恵器無台環である。9は大振りで口径15.9cm、底部・口縁部共に薄作りである。灰褐色系でやや焼きが甘い。底部回転ヘラケズリ調整。底部外面には「三」状のヘラ記号が刻まれている。10は底部が厚く、口縁部



第64図 第24号住居跡

に向かって先細りする。黄灰褐色から褐灰色の焼き上がり。

11は土師器壺。12～16は土師器甕である。12・14・15は胴部縦割り、13は武蔵型甕に連なる薄壁で、胴部上位に斜め削り加わる。16は一部にヘラ状工具によるミガキ?に近い調整が加えられるが、基本的には武蔵系の削り甕に似る。17は磨石か。各面は角が取れて平滑な使用面をもつ。石材は安山岩と推定される。18・19は土玉、20は管状土釘である。図示した以外に桃形薄片が199.40g出土した。

出土遺物の時期は、北武蔵型環の形態と、須恵器

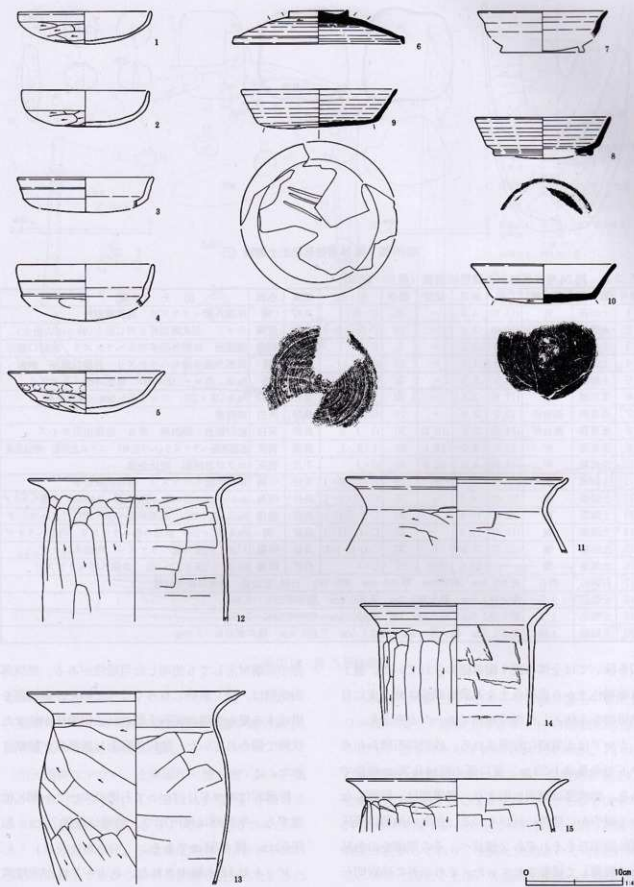
環類の様相から8世紀初頭と考えられる。

第25号住居跡 (第67・68図)

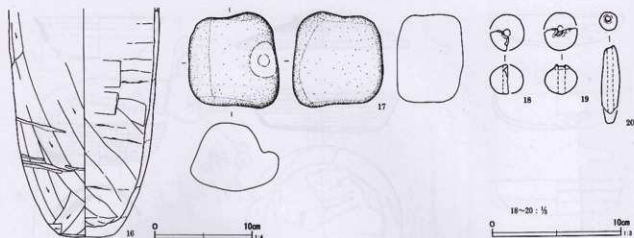
第25号住居跡はP・Q・9・10グリッド、谷部に移行する緩斜面に位置する。重複する第24号住居跡と第14号土壌に切られ、覆土上面には第8号溝跡が被覆していた。また、北側コーナー周辺は攪乱によって削平されていた。

平面形は方形と推定される。規模は長軸長5.04m、短軸長4.90m、深さ0.58mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、第14号土壌のある南西壁周



第65图 第24号住居跡出土遺物 (1)



第66図 第24号住居跡出土遺物(2)

第23表 第24号住居跡出土遺物観察表(第65・66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(13.6)	3.3	—	25	C・E・I	良好	褐	体部外面ヘラケズリ 北武蔵型坏
2	土師器	坏	(13.0)	3.8	—	20	C・E・G・H・I	良好	橙褐	カマド 北武蔵型坏と同じ胎土(粉っぽい胎土)
3	土師器	坏	14.0	3.2	—	5	C・I	普通	暗褐	確認面 体部外面手持ちヘラケズリ 有段口縁坏
4	土師器	坏	14.0	4.4	—	10	G・I	普通	褐	体部外面手持ちヘラケズリ 有段口縁坏 無彩
5	土師器	皿	16.1	3.3	—	70	C・H・I・K	良好	褐	№9 カマド(床+38) 体部外面ヘラケズリ
6	須恵器	蓋	(17.5)	3.4	—	50	I・J・K・L	良好	灰白	№1(床+28) ツマミ径5.9cm 南比企産
7	須恵器	高台坏	13.3	2.8	—	10	G	良好	灰白	湖西産
8	須恵器	高台坏	(14.8)	3.9	(10.2)	30	G・I・K	良好	灰白	貼付高台 湖西産 坏B 底部出尻タイプ
9	須恵器	坏	15.9	4.0	11.1	60	I・J・L	普通	黄灰	底部回転ヘラケズリ(ヘラ記号) ロクロ左回転 南比企産
10	須恵器	坏	(14.7)	4.0	10.3	50	G・J	不良	褐灰	ロクロ右回転 南比企産
11	土師器	壺	(22.7)	7.7	—	15	C・E・H・I	良好	明褐	体部外面ヘラケズリ 雲母状微粒子
12	土師器	壺	(21.4)	14.7	—	20	C・G・I・K	良好	明褐	№4・7(床+25~36) 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
13	土師器	壺	22.4	19.8	—	90	C・E・G・H・I	良好	橙褐	№8(床+32) 胴部外面ヘラケズリ ノッキング
14	土師器	壺	(19.4)	12.6	—	25	C・G・H・I	良好	褐	№4(床+25) 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
15	土師器	壺	(22.7)	5.5	—	30	C・G・H・I・K	良好	明褐	SJ26 胴部外面ヘラケズリ 内面木口ナデ
16	土師器	壺	—	23.6	5.8	20	C・I	良好	暗褐	№2・5(床+27~32) 体部外面ヘラケズリ
17	石製品	磨石	長さ9.8cm	幅9.4cm	厚さ6.8cm	970.96g	石材:安山岩	表面に鉄分付着		
18	土製品	土玉	最大径1.5cm	最大高2.2cm	孔径0.6cm	残存率25%	3.68g			
19	土製品	土玉	最大径2.6cm	最大高2.3cm	孔径0.5cm	残存率50%	7.86g			
20	土製品	土鉢	長さ5.2cm	最大径1.5cm	厚さ1.5cm	孔径0.4cm	残存率85%	7.99g		

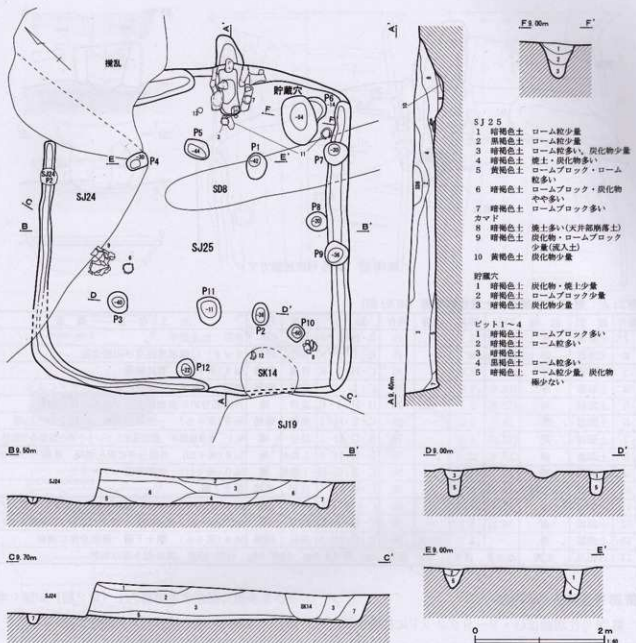
辺を除いては全体に硬く踏み固められていた。覆土は暗褐色土から黒褐色土を基調に構成され、主に自然堆積を主体とした埋没過程であったと考えた。

カマドは北東壁に設置される。砂岩切石積みのカマドで全長は1.23m、焚口部の幅は0.30m前後である。燃焼部は壁内に収まり、煙道部は一段高くなって緩やかに壁外に延びている。左右の袖部は凝灰質砂岩切石をそれぞれ2個並べ、その周囲を白色粘土で被覆して構築されていた。それ以外に砂岩切石は燃焼部に2個落ち込んだ状態で出土、右袖の外にも1個浮いた(ずれた)状態で出土しており、天井

部の架構材としても使用した可能性がある。燃焼部内側壁は、強く被熱しもろくなっていた。右袖部を構成する最も手前の切石上部には土師器坏が伏せた状態で置かれていた。焚口部底面は被熱痕が観察された。

貯蔵穴はカマドに向かって右側のコーナー部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長さ76cm、短径52cm、深さ54cmである。

ビットは12本検出された。P1~P4が主柱穴と考えられる。P5・P11は中軸線上に乗るが、帰属は不明確である。他のビットは住居跡には伴わ



第67図 第25号住居跡

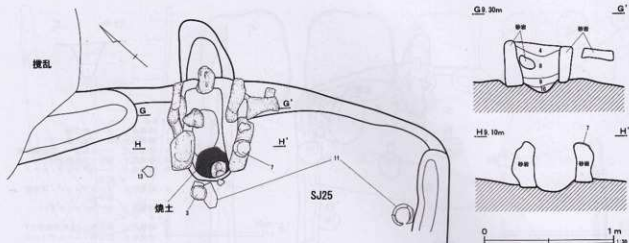
ない可能性が高い。

壁溝はカマドの周囲と南西壁の一部が途切れる。深さは2~5cmと非常に浅い。

出土遺物は少ない。土器器環・甕・壺・鉢と石製品がある(第69図)。1・2は比企型環。小破片であり、口径は不安定。もっと大きくなるであろう。3・4は環蓋模倣環。3はほぼ完形で、カマド焚口部前面の覆土下層から伏せた状態で出土した。5は有段口縁環。6・7は坏身模倣環。6は覆土下層(床上6cm)から正位の状態で出土。7はカマド右袖上

から伏せた状態で出土した。8は鉢で覆土中層出土。9の甕は覆土下層出土である。11は貯蔵穴の脇から出土。置き台として使用されたものか。12の壺は古墳時代前期~中期の混入品。位置的に第14号土壇に入る。いずれにせよ遺構に伴うものではない。14はカマド覆土から出土した石製品。安山岩製で、表面が被熱しており、支脚に使用された可能性がある。特に、図上の上部、先端のやや尖った部分が強く被熱している。

時期は6世紀後半~末葉と考えておきたい。



第68図 第25号住居跡カマド

第24表 第25号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(10.4)	2.7	—	10	C・H・I・J	良好	赤彩	比企型坏
2	土師器	坏	(11.4)	2.7	—	10	E・I・J・K	良好	淡褐	カマド 口縁部外面及び内面赤彩
3	土師器	坏	12.3	3.6	—	95	C・H・I・K	普通	橙褐	No.2 (床+25) 磨耗顯著
4	土師器	坏	(14.0)	3.0	—	10	C・I	良好	明褐	無彩 模倣坏 口縁部の後はヨコナデによる
5	土師器	坏	(12.8)	3.1	—	20	G・H・I・K	良好	褐	外面部分的に炭素吸着が 基本的には無彩
6	土師器	坏	12.5	4.0	—	95	C・E・H・I	良好	暗褐	No.8 (床+6) 一部器面剥離 内外面黒色処理
7	土師器	坏	(12.5)	4.4	—	75	E・G・H・I	良好	褐	No.1 坏身模倣坏 器面風化しているが黒色処理の可能性
8	土師器	鉢	17.4	12.8	6.7	75	D・G・H・I	L良好	褐	No.6 (床+23) 外面全体に風化磨耗 底部凹凹あり
9	土師器	甕	19.7	26.6	—	80	C・E・G・H	I良好	褐	No.9 (床+11) 体部外面ヘラケズリ
10	土師器	小型甕	(16.8)	8.9	—	30	C・G・H・I	良好	淡褐	覆土下層
11	土師器	甕	17.4	15.3	—	55	C・E・H・I・L	良好	褐	No.3・5 (床-2~+7) 胴部外面ヘラケズリ、一部ナデ
12	土師器	壺	14.2	5.2	—	70	C・H・I・K	良好	褐	No.7 (床+36) 複合口縁 ハケ目は細密 口縁部ミガキ
13	土師器	甕	—	3.2	(10.0)	25	C・G・H・I	良好	明褐	No.4 (床+6) 覆土下層 器面全体に磨耗
14	石製品	支脚	カマド	長さ17.3cm	幅10.3cm	厚さ8.4cm	1847.84g			石材:砂岩 裏面上部は被熱

第26号住居跡 (第70図)

第26号住居跡はO・P-9グリッドに位置する。第10号土壌・第18号土壌と重複し、第10号土壌は本住居跡を切っていた。第18号土壌との新旧関係は当初不明確であったが、第26号住居跡床面を掘り込んで被熱焼土面が検出され、土師器焼成壤であること、そして第18号土壌の方が新しいことが判明した。

平面形は比較的整った方で、各辺が僅かに膨らむ傾向にある。規模は長軸長6.33m、短軸長5.82m、深さ0.48mである。主軸方位はN-46°-Wを指す。

床面は平坦である。カマド前面から住居中央部にかけて硬く踏み固められていた。覆土はロームプロ

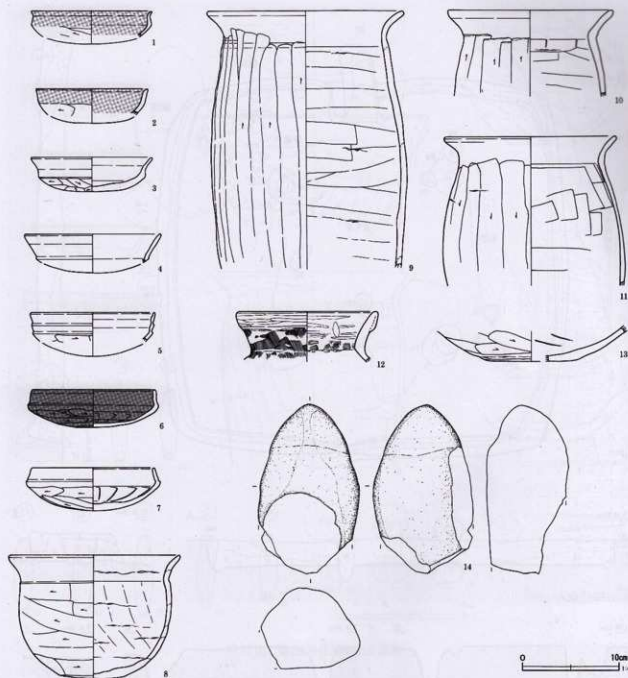
ックを多量に混在する暗褐色土(第2層)が厚く堆積し、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北西壁中央に設置される。全長1.20m、焚口部幅0.42mである。燃焼部は壁を60cm切り込んで構築されていた。袖部と天井部崩落土には白色粘土・黄灰色粘土が用いられていた。

貯蔵穴はカマドに向かって右側のコーナー部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径69cm、短径48cm、深さ40cmである。

ピットは9本検出された。P1~P4が主柱穴と考えられる。P4とP5が複合し、P1・P3も2基のピットが重複していることから、1度建て替えを行った可能性がある。

壁溝は全周する。深さ2~8cm。

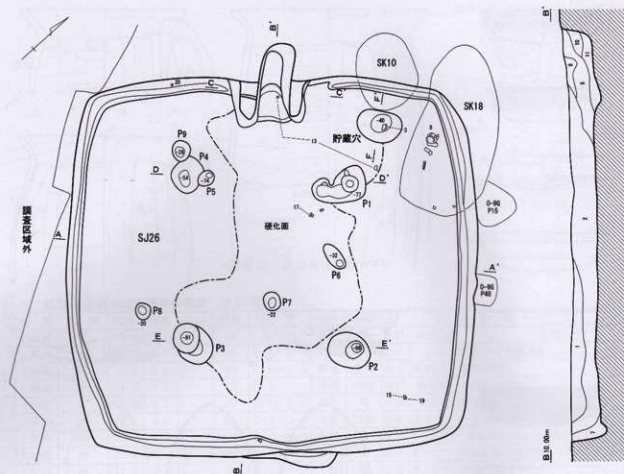


第69図 第25号住居跡出土遺物

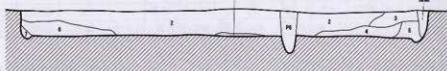
出土遺物は少ない。土師器・環・椀・鉢・甕・小型甕・壺、滑石製紡錘車、土錘、土玉、鉄製品がある(第71図)。1～4は模倣杯である。1はP4内から、3は貯蔵穴内下層から出土した。4は有段口縁杯。5は比企型環。推定径が大きく、口縁部形態からも混入品であろう。6は北武蔵型環系の椀で混入の疑いがある。覆土出土。7は鉢。8は小型甕。平面的な位置関係からは第18号土壌に入るが、土壌底面は傾斜することから本住居跡に伴うものと判断した。

床面出土で、二次被熱により表面は剥離が著しい。このことから土師器焼成墳に伴うものではないことがわかる。9・10は長甕。13は滑石製紡錘車。カマド内の破片とP1東脇の破片が接合した。14～20は管状土錘。21～24は土玉。25は刀子柄(茎)部の破片である。

時期は不明確であるが、7世紀前半～中頃と推定しておきたい。



A 10.00m



C 10.00m



D 2.50m



D'

E 2.50m



E'

F 9.70m



SJ26

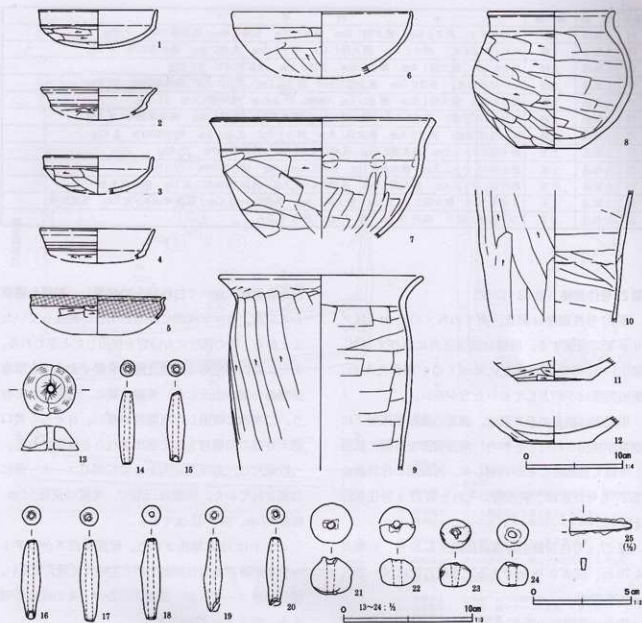
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量。焼土粒子やや多い(人為的埋め戻しか)
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量。焼土粒子多い
- 5 褐色土 ローム粒子やや多い
- 6 黄褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子多い(投棄か)
- 7 褐色土 ローム粒子やや多い
- カマド
- 8 褐色土 白色粘土粒子・焼土粒子少量
- 9 灰白色粘土 砂質粘土主体。焼土ブロック粒子混じる(天井部崩落土)
- 10 灰白色粘土 焼土ブロック多量(天井部崩落土)
- 11 黒色土 灰・炭化物・焼土混じる(天井部崩落土・灰層)
- 12 明褐色土
- 13 黄灰色粘土 カマド構築粘土。崩落土
- 14 褐色土
- 15 白色粘土

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量含む。しまりあり。粘性なし
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。しまりなし。粘性なし
- 3 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。しまりあり。粘性あり

0 2m

第70図 第26号住居跡



第71図 第26号住居跡出土遺物

第25表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(12.2)	4.9	—	30	C・I	良好	橙褐	P4 模倣坏 体部外面ヘラケズリ
2	土師器	坏	(11.8)	2.8	—	10	I	良好	褐	体部外面ケズリ
3	土師器	坏	(11.4)	3.4	—	30	G・I	良好	橙褐	№2(床-20) 貯穴内 粉っぽい 模倣坏
4	土師器	坏	(11.8)	3.0	—	15	H・I	良好	明褐	内外面黒色処理か
5	土師器	坏	(14.0)	2.4	—	15	C・L	良好	淡褐	比企型坏 赤彩 体部外面ケズリ
6	土師器	碗	(18.5)	6.4	—	15	C・E・I	良好	黄褐	北武蔵型 体部外面 ケズリ 内面ナデか
7	土師器	鉢	(22.2)	12.3	—	35	C・G・I	良好	褐	カマド 外面強く二次被熱を受け器面剥落
8	土師器	小型壺	12.6	14.1	6.6	75	A・I	良好	明褐	№1(床直) 二次被熱により器面剥落 内面ヘラナデ
9	土師器	壺	(20.7)	20.2	—	30	C・E・H・I・L	良好	褐	カマド 胴部外面ヘラケズリ
10	土師器	壺	—	13.6	—	70	C・H・I・L	良好	褐	外面ヘラケズリ 内面剥落顕著
11	土師器	壺	—	2.3	7.8	55	A・D・E・H・I	良好	褐	銀雲母状の鉱物入る 混入か
12	土師器	壺	—	2.6	(8.0)	25	H・I	良好	明褐	胴部ケズリ後ナデか
13	石製品	紡錘車	№3・4(床直+14)	最大径4.0cm	厚さ1.7cm	孔径0.7cm	残存率80%	24.94g	上面放射状に線刻 滑石製	

番号	種別	器種	備考
14	土製品	土鉢	2号カマド 長さ5.6cm 最大径1.2cm 厚さ1.3cm 孔径0.4cm 残存率100% 7.99g
15	土製品	土鉢	№11(ほぼ床直) 長さ5.5cm 最大径1.4cm 厚さ1.3cm 孔径0.4cm 残存率95% 8.04g
16	土製品	土鉢	長さ6.1cm 最大径1.4cm 厚さ1.5cm 孔径0.4cm 残存率95% 10.22g
17	土製品	土鉢	№6(ほぼ床直) 長さ6.3cm 最大径1.5cm 厚さ1.5cm 孔径0.4cm 残存率98% 10.61g
18	土製品	土鉢	長さ7.3cm 最大径1.5cm 厚さ1.4cm 孔径0.4~0.6cm 残存率100% 11.99g
19	土製品	土鉢	№10(ほぼ床直) 長さ5.6cm 最大径1.4cm 厚さ1.4cm 孔径0.4cm 残存率95% 8.75g
20	土製品	土鉢	№5(ほぼ床直) 長さ5.3cm 最大径1.4cm 厚さ1.3cm 孔径0.4cm 残存率95% 7.67g
21	土製品	土玉	最大径3.0×3.2cm 最大高2.9cm 孔径0.5~0.6cm 残存率100% 22.62g
22	土製品	土玉	最大径(1.4)×2.7cm 最大高2.1cm 孔径0.5~0.8cm 残存率50% (7.17)g
23	土製品	土玉	最大径2.2×2.4cm 最大高1.9cm 孔径0.4~0.7cm 残存率100% 8.15g 使用痕あり
24	土製品	土玉	2号カマド 最大径2.1×2.4cm 最大高1.9cm 孔径0.5~0.6cm 残存率98% 8.59g 頂部欠損
25	鉄製品	刀子	刀子基部の破片 現長 3.2cm 幅 0.6cm 厚さ 0.2cm

第27号住居跡 (第72・73図)

第27号住居跡は調査区南半のN・O-8・9グリッドに位置する。西壁は調査区外に延びていた。第13・17号土壌の存在に気づくのが遅れたため、新旧関係は不明としておいた方がよい。

平面形は横長の長方形で、調査の過程で床面下に壁溝が検出されたことから、南西壁部を外側に拡張して建て替えたことが判明した。古段階の住居跡を第27b号住居跡、新段階のそれを第27a号住居跡とする。

第27a号住居跡の規模は長軸長5.10m、短軸長4.70m、深さ0.18mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面は拡張前の第27b号住居跡を約10cm埋め戻し作られていた。主柱穴の内側に硬く踏み固められていたが、北東壁際が特に軟弱であった。

覆土は下層にローム粒子を含む暗褐色土、上層にロームブロックを多量に含む明褐色土が堆積していた。上層は埋め戻された可能性がある。

カマドは北西壁に位置し、全長1.23m、焚口部幅は0.27mである。燃焼部は壁を30cmほど掘り込んで構築される。奥壁は急角度で立ち上がり、壁外の煙道部に続く。左袖部には、手前に底部を欠いた(削平された?)土師器長壺を逆位に据え、その奥に凝灰質砂岩の切石を縦方向に並べていた。更にその周囲を白色粘土で被覆していた。右袖部は砂岩切

石を2個縦に並べて白色粘土で被覆し、袖部を構築していた。カマド周囲に砂岩の切石が散乱していたことから、別の部位にも砂岩を使用したと思われる。また、焚口部左右の長壺と砂岩を繋ぐように土師器長壺の一部が出土した。長壺は縦に二分割されており、二次的に破損した可能性が高い。おそらく焚口部天井部の架構材として使用されたと推定される。

貯蔵穴は、カマドに向かって右側のコーナー部に設置されていた。形態は円形で、規模は長径51cm、短径49cm、深さ42cmである。

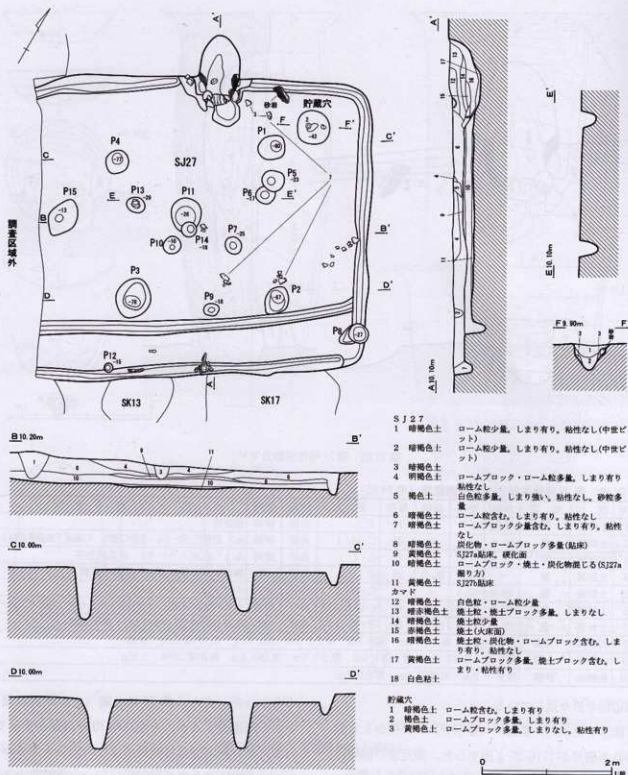
ピットは15本検出された。配置や深さからP1~P4が第27a号住居跡に伴う主柱穴と考えて良い。壁溝は東コーナーが一部途切れるが、その他は全周する。深さ7~22cmである。

第27b号住居跡は平面形がかなり横長の長方形で、規模は長軸長5.10mと変わらないが、短軸長は4.00m、深さは0.30mである。

床面は第27a号住居跡床面を約10cm削いだ位置で検出された。カマド前面から住居中央部は硬く踏み固められていた。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。おそらく、同位置で使用したと考えられよう。主柱穴は検出できなかった。南西壁の壁溝は途切れずに巡る。

出土遺物は少ない。土師器環・壺・甗、土鉢、鉄製品がある(第74図)。1~3は土師器環。1・2は模倣環で、2は有段口縁環。貯蔵穴内から出土し



- SJ27
- | | |
|---------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒少量。しまり有り。粘性なし(中世ビット) |
| 2 暗褐色土 | ローム粒少量。しまり有り。粘性なし(中世ビット) |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒多量。しまり有り |
| 4 明褐色土 | 粘性なし |
| 5 褐色土 | 白色粒多量。しまり強い。粘性なし。砂粒多量 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒含む。しまり有り。粘性なし |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。しまり有り。粘性なし |
| 8 暗褐色土 | 炭化物・ロームブロック多量(貼床) |
| 9 黄褐色土 | SJ27a貼床。硬化面 |
| 10 暗褐色土 | ロームブロック・焼土・炭化物混じる(SJ27a掘り方) |
| 11 黄褐色土 | SJ27b貼床 |
| 12 暗褐色土 | カマド |
| 13 暗褐色土 | 白色粒・ローム粒少量 |
| 14 暗褐色土 | 焼土・焼土ブロック多量。しまりなし |
| 15 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 16 暗褐色土 | 焼土(灰床面) |
| 17 黄褐色土 | 焼土粒・炭化物・ロームブロック含む。しまり有り。粘性なし |
| 18 白色粘土 | ロームブロック多量。焼土ブロック含む。しまり・粘性有り |

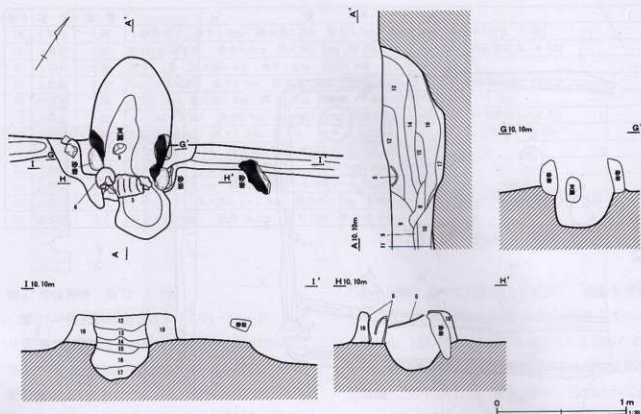
貯蔵穴

- | | |
|--------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒含む。しまり有り |
| 2 褐色土 | ロームブロック多量。しまり有り |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック多量。しまりなし。粘性有り |

た。3は北武蔵型環。口縁部が短く内彎する丸底タイプである。カマド脇の覆土下層から出土した。4～6は土師器長甕。いずれも非在地系と思われる。4は底部はやや径が大きく木葉痕を遺す。胴部はヘラケズリ後ミガキが加わる。銀雲母状の微粒子が目

立つ。おそらく東関東系と推定される。5・6の長甕も胴部へラナデ後、縦位のミガキ調整されるもので、東関東系と考えておきたい。7は甕で、内外面共に丁寧に磨かれている。

8は石製支脚。9は管状土鍾。10は鉄鍬基部片。



第73図 第27号住居跡カマド

第26表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(11.6)	2.7	—	10	I	良好	淡褐	横做坏
2	土師器	坏	10.6	3.6	—	95	C・H・I	良好	明褐	№3・貯蔵穴(床-25) 有段口縁外 口縁直下無調整部残存
3	土師器	坏	11.3	3.5	—	70	C・I	良好	橙褐	№1・2(床+3~8) 北武蔵型坏
4	土師器	甕	—	4.2	(6.2)	25	E	良好	褐	胴部ケズリ後ミガキ 底部木葉痕
5	土師器	甕	18.0	37.3	—	50	G・H・I・L	良好	明褐	カマド№1 カマド(床+37)
6	土師器	甕	19.0	23.0	—	95	C・G・H・I・K	良好	橙褐	カマド№2(床直) 体部外面ヘラミガキ 内面木口ナデ
7	土師器	甕	(22.4)	27.0	(7.8)	20	D・E・I・K	良好	褐	№2・6・8(床+3~10) 器面剥離
8	石製品	支脚	カマド№3	長さ17.0cm	幅9.3cm	厚さ7.3cm	935.03g	石材:安山岩	被熱	
9	土製品	土罐	掘り方	長さ5.4cm	最大径1.3cm	厚さ1.2cm	孔径0.4cm	残存率100%	7.56g	
10	鉄製品	鉄鏝	残長4.2cm	刃幅2.8cm	厚さ0.2cm					

短辺側を折り返している。

図示した以外に製煉炉(竪形炉)の炉壁かとも思われる破片が1116.25g出土した。還元部の隙間にスサ入りの粘土が見える。混入であろうか。

時期は7世紀後半と考えられる。

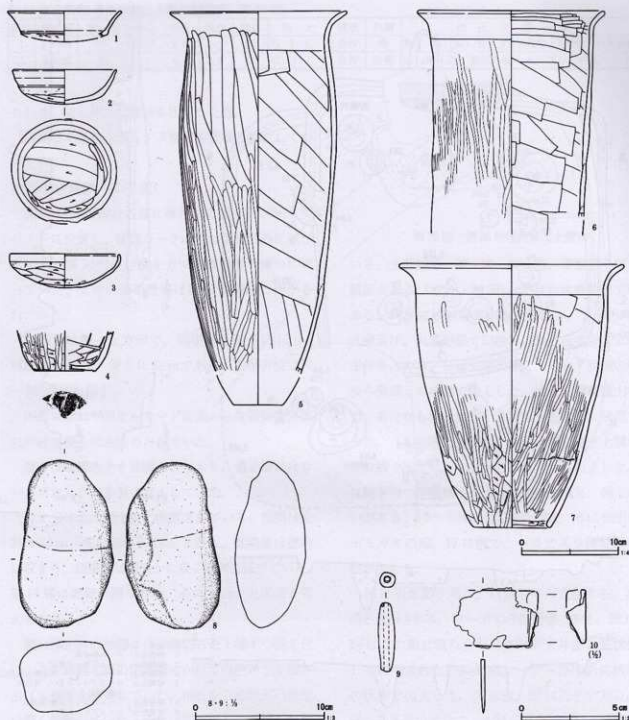
第28号住居跡 (第75図)

第28号住居跡は谷部に移行するN-9・10グリッドに位置する。第54号住居跡を切り、第49号住居跡、第10・15号溝跡に上面を削平されていた。カマド手前を攪乱され、遺構の遺存状態はあまり良

くなかった。また、第16号土壌(土師器焼成墳)とも一部重複するが、上面に第10号溝跡が乗っているために新旧関係は明確ではない部分もあるが、おそらく第16号土壌の方が新しいものと推定される。平面形は台形で、規模は一辺4.50m、深さ0.35mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

床面は起伏が目立ち一定しない。覆土はローム混じりの暗褐色土を基調とするが、上面は攪乱の影響を受け堆積環境は不明確であった。

カマドは北西壁に設置されるが、煙道部のみ検出



第74図 第27号住居跡出土遺物1

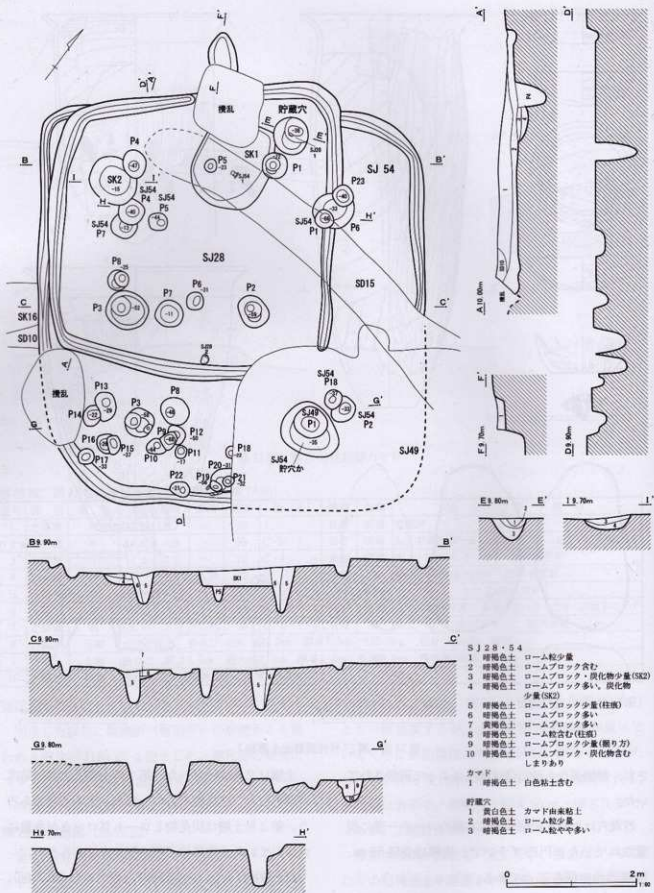
され、燃焼部から焚口部は攪乱によって破壊されていた。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇のコーナー部に設置されていた。円形プランで、規模は長径56 cm、短径53 cm、深さ36 cmである。

ビットは11本検出された。P1～P4が本住居跡に伴う主柱穴と考えられる。

土壌は2基検出された。第1号土壌は上面に貼床が認められ、住居掘り方の一部か、床下土壌であろう。第2号土壌は炭化物和ロームブロックが多量に含まれていた。性格は不明。掘り方であろうか。

出土遺物は少ない。土師器環と壺がある(第76図)。1は貯蔵穴内から出土した比企型環である。腰の位置が低く、口縁部の内彎がないなど新しい様相がみ



第75図 第28・54号住居跡

第27表 第28号住居跡出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	環	10.7	2.9	—	80	G・I・K	良好	褐	貯穴 №1 (床+16) 雲母状微粒子を含む 内外面赤彩
2	土師器	壺	—	4.2	8.8	75	C・D・I	良好	淡褐	№1 (床+3) 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ



0 10cm 1:4

第76図 第28号住居跡出土遺物

いる。土師器環・皿・碗・甕・壺、須恵器平瓶、鉄製品がある (第78・79図)。1は北武蔵型暗文環である。内面に放射暗文が施文される。2～12は北武蔵型環。丸底形態で口縁部は短く直立するものが主体を占める。2は完形の環で、カマド西側の壁際から横倒しの状態で出土した。出土位置は覆土中層で、あたかも棚状施設から滑落したような状況であった。3も完形品である。南西壁際の覆土上層から正位置で出土した。4・9は床面から出土した。10は腰を持つ平底風のつくりに新相が窺え、混入の疑いがある。13～15は北武蔵型の皿。16は全面赤彩+ミガギの皿。17は碗で、ヘラケズリ後ミガギ調整が加わる。

18は須恵器平瓶か。口縁部のみ遺存する。湖西産と推定される。19～27は土師器甕である。19・23・24はこの順に重ねられ、カマド天井部の架構材として使用された。20は北コーナー部床面に横倒しの状態で出土した。28は壺。29は刀子である。刃部から基部の破片で、木柄が遺存している。背には関がないようだ。刃部の関は緩い。図化した以外に製錬系の炉内滓が100.72g出土している。

時期は8世紀初頭頃と考えられる。

第30号住居跡 (第80図)

第30号住居跡はM・N-7・8グリッドに位置し、西コーナー付近は調査区外に延びている。南側に位置する第29号住居跡のカマド煙道部が、僅かに本住居跡に乗っていた。

られる。2は南東壁際から出土した壺。

時期は不明確ながら、7世紀中葉頃と推定しておきたい。

第29号住居跡 (第77図)

第29号住居跡は谷部に移行する肩部のN-8グリッドに位置し、南側コーナー部は調査区外に延びている。第30号住居跡をカマド煙道部が僅かに切っていた。また、南東壁部は第11号溝跡に削平されていた。

平面形は整った方で、規模は長軸長5.10m、短軸長4.80m、深さ0.32mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面から住居跡中央部にかけて硬く踏み固められていた。

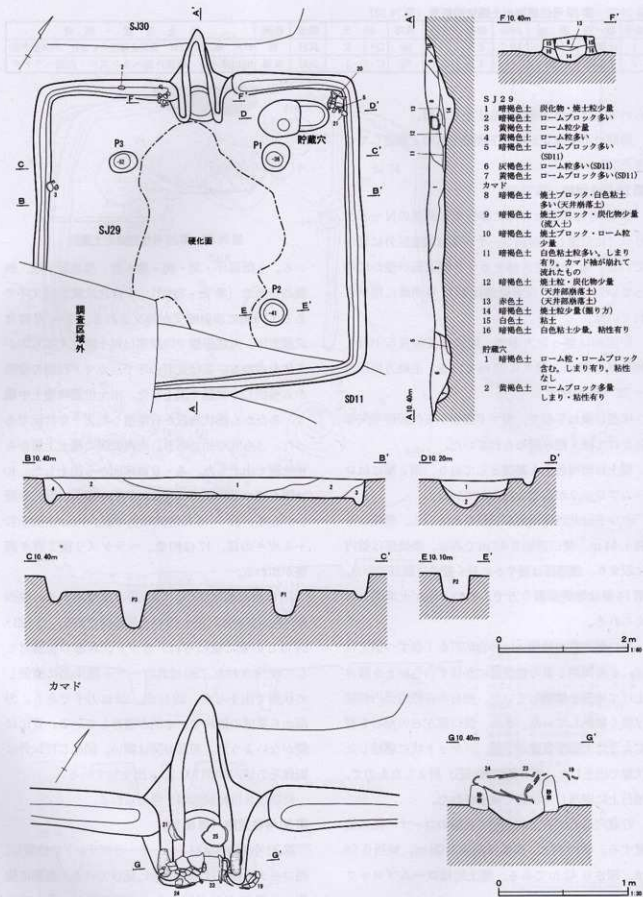
覆土は暗褐色土を基調としており、第2層にはロームブロックが多量に混入していた。

カマドは北西壁中央に設置されている。規模は全長1.44m、焚口部幅0.43mである。燃焼部は壁内に収まり、煙道部は緩やかに長く壁外に延びていた。第14層は燃焼部掘り方で、その上面が火床面と考えられる。

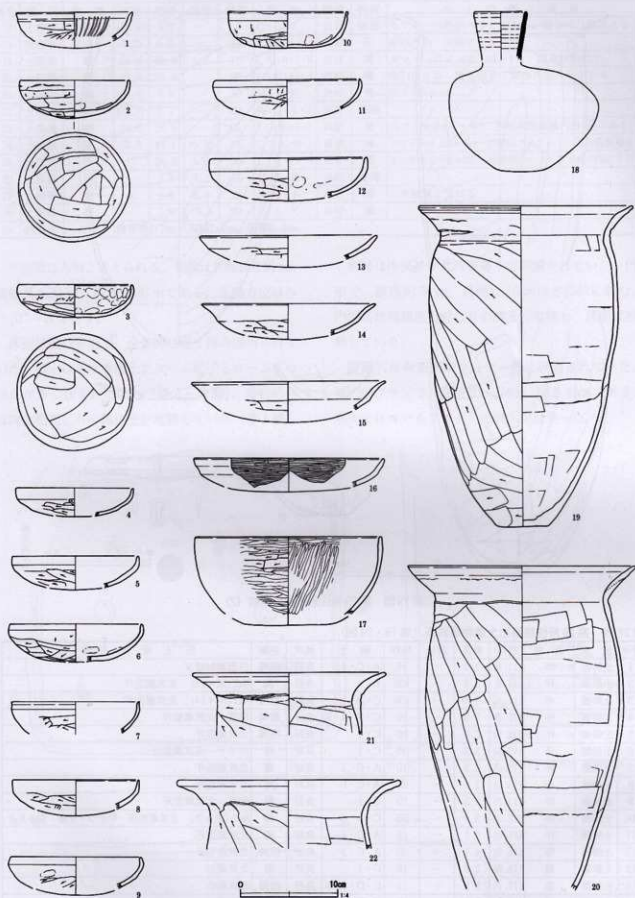
焚口部左右の袖部には砂岩切石を1個ずつ据え付け、その周囲と奥の燃焼部にかけて白色粘土を積み上げて袖部を構築していた。袖石から燃焼部内側壁は強く被熱していた。また、焚口部左右の袖石を繋ぐように土師器長甕が3個、ソケット状に連結した状態で出土した。天井部架構(芯)材としたもので、袖石上に崩落した状態で検出された。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇のコーナー部に位置する。楕円形で、規模は長径1.08m、短径0.58m、深さ0.42mである。埋土にはロームブロックが多量に含まれていた。

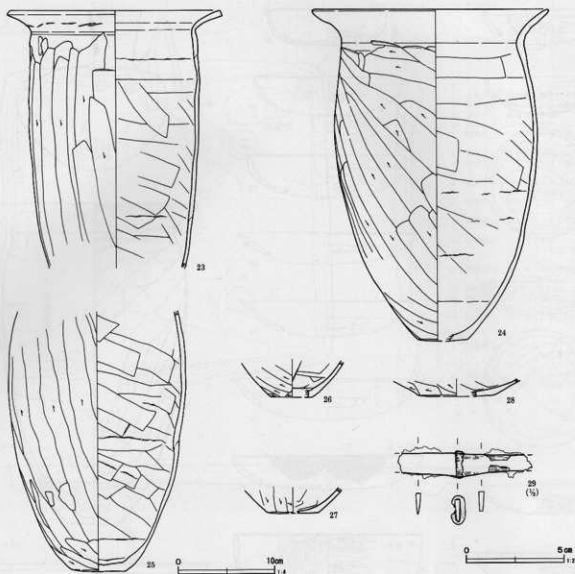
出土遺物は、土師器甕を主体に比較的まとまって



第77図 第29号住居跡・カマド



第78图 第29号住居跡出土遺物 (I)



第79図 第29号住居跡出土遺物 (2)

第28表 第29号住居跡出土遺物観察表 (第78・79図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(11.8)	3.0	—	15	A・C・I	良好	橙褐	内面放射暗文
2	土師器	坏	11.0	3.9	—	100	K	良好	褐	No2 (床+18) 北武蔵型坏
3	土師器	坏	(11.6)	3.4	—	100	C・H・I	良好	橙褐	No1 (床+24) 北武蔵型坏
4	土師器	坏	(12.0)	2.9	—	10	C・E・I・K	良好	橙褐	床直 北武蔵型坏
5	土師器	坏	(12.9)	2.8	—	20	C・I	良好	橙褐	北武蔵型坏
6	土師器	坏	(13.5)	3.9	—	35	C・I	良好	褐	カマド 北武蔵型坏
7	土師器	坏	(13.0)	3.3	—	10	A・C・I	良好	褐	北武蔵型坏
8	土師器	坏	(13.0)	3.0	—	20	A・C・F	良好	褐	北武蔵型坏
9	土師器	坏	(13.3)	3.2	—	10	C・I	良好	褐	床直 北武蔵型坏
10	土師器	坏	(12.2)	3.8	—	50	C・I	良好	褐	No5 (床+3) 北武蔵型坏 ややつくり雑 歪みあり
11	土師器	坏	(15.0)	3.1	—	15	A・C・I	良好	褐	北武蔵型坏
12	土師器	坏	(16.0)	4.1	—	10	A・C・I	良好	橙褐	北武蔵型坏
13	土師器	皿	(18.0)	2.5	—	10	C・I	良好	褐	北武蔵型
14	土師器	皿	(17.7)	3.2	—	15	C・D・I・K	良好	橙褐	北武蔵型
15	土師器	皿	(19.6)	3.0	—	10	C・I	良好	褐	北武蔵型
16	土師器	皿	(19.4)	3.0	—	10	A	良好	褐	内外面赤彩+ヘラミガキ 南関東(武蔵南部系)か

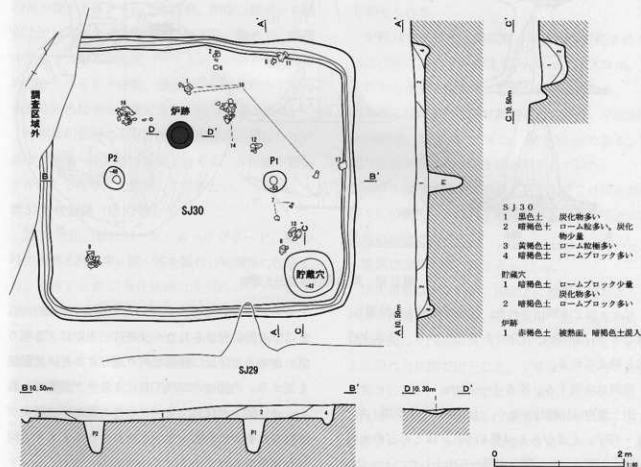
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
17	土師器	碗	(19.0)	8.0	—	10	C・E・I	良好	明褐	カマド 内外面ヘラミガキ 一部ケズリ痕みえる
18	須恵器	平瓶か	(5.2)	5.0	—	10	I・K	良好	灰	湖西産か 回転クロコナデ
19	土師器	壺	21.8	32.9	5.2	75	C・G・H・I・K	良好	褐	カマド カマド№3(床+11) 雲母状微粒子
20	土師器	壺	23.0	33.4	—	80	C・G・H・I	良好	褐	№5(床+3) 磨耗顕著 胴部外面ヘラケズリ
21	土師器	壺	(19.6)	6.5	—	30	C・I・K	良好	褐	№4(床+19)
22	土師器	壺	(22.7)	7.1	—	20	A・C・I・K	良好	淡褐	
23	土師器	壺	21.6	26.5	—	95	C・E・G・I・L	良好	褐	カマド№2(床+8) 胴部横断面楕円形(歪みあり)
24	土師器	壺	23.8	34.1	(5.3)	85	C・D・G・H・I	普通	褐	カマド№1(床+8) 口縁部ヨコナデ 一部指頭痕残る
25	土師器	壺	—	26.8	5.6	50	C・E・H・I	良好	褐	カマド№5(床+25) 胴部外面ヘラケズリ部分的にナデ
26	土師器	壺	—	3.7	4.2	15	C・I・K	良好	暗褐	
27	土師器	壺	—	2.6	5.4	35	A・C・I	良好	褐	二次被熱を受ける
28	土師器	壺	—	1.8	7.8	20	C・I・K	良好	褐	
29	鉄製品	刀子	残存長6.7cm 刃幅1.2cm 背幅0.2cm							

平面形は方形と考えられる。規模は長軸長4.91m、短軸長4.31m、深さ0.26mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

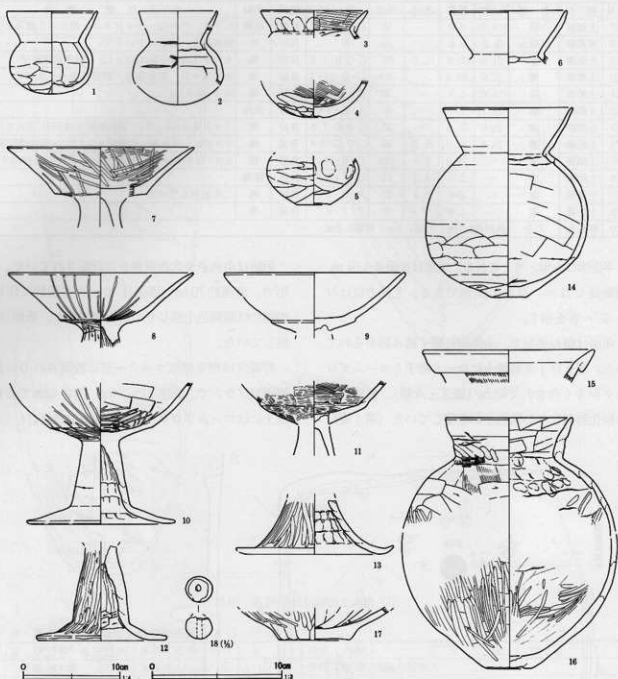
床面は概ね平坦で、全体的に硬く踏み固められていた。覆土は1次堆積土にローム粒子とロームブロックが多く含まれていた(第3・4層)、最終的には炭化物混じりの黒色土が堆積していた(第1層)。

炉跡は中央やや北西壁寄りに設置されていた。円形で、直径約70cm、底面は10cmほど皿状に窪む。内面には暗褐色土混じりの焼土が堆積し、底面は被熱していた。

貯蔵穴は南東壁東コーナー部に設置されていた。略円形プランで、直径70~74cm、深さ42cmである。埋土にはロームブロックの混入が目立った。



第80図 第30号住居跡



第81図 第30号住居跡出土遺物

ビットは2本検出された。住居長軸線上に位置し、深さも50cm前後と十分であることから、2本主柱穴と考えられる。

壁溝は全周する。深さ4～12cm。

出土遺物は比較的少なく、土師器鉢・小型埴・埴・壺・高環、土玉がある(第81図)。ほとんどの土器が覆土下層ないし、覆土中層から出土した。1・2・4・5・6は小型埴。3は鉢か。1は完形の小型埴

である。床面から僅かに浮いた位置から出土した。2は二次的に付けられたヘラキズ(刃物による削り痕)がある。3は口縁部を折り返してあり、指頭痕を加える。内面は木口状工具によるナデ調整で、鉢か。4は胎土が精良でケズリと目の細かい木口ナデ調整されるが、表面は光沢を持ち、ヘラミガキと同等の効果をあげている。

7～13は高環である。8の環部には暗文状のミ

第29表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色澤	出土位置・備考
1	土師器	小型埴	9.2	8.6	—	100	C・I・K	良好	橙褐色	№7(床+3) 胴部下半ケズリ後ナデ 黒斑あり
2	土師器	小型埴	—	6.1	—	40	C・H・I	普通	褐色	№3(床+5) 胴部にヘラキズあり 胴部内面ヘラナデ
3	土師器	鉢か	(10.9)	2.4	—	25	G・L	良好	淡褐色	口縁部折り返し 口縁部指頭痕 内面木口ナデ
4	土師器	埴	—	4.9	2.1	30	H・K	良好	褐色	胴部下半木口ナデ後ミガキ
5	土師器	小型埴か	—	4.7	3.3	80	C	良好	淡褐色	№2(床+7) 胴部上半ヘラナデ 下半ヘラケズリか
6	土師器	埴	(12.0)	5.5	—	20	C・G・I・L	良好	褐色	№4(床直) 胴部内面ナデorヘラナデ
7	土師器	高坏	(19.0)	5.2	—	15	C・D・H・I	普通	褐色	№13-15(床+6~7) 外面ナデ後ミガキ 内面木口ナデミガキ
8	土師器	高坏	(19.0)	7.8	—	25	C・I	良好	褐色	pit1 №17(床+7) 坏部粗いミガキ 胴部ケズリ後ミガキ
9	土師器	高坏	(18.6)	6.2	—	50	C・E・I	良好	橙褐色	№18(床+11) 内外面ナデ調整
10	土師器	高坏	—	14.6	(15.4)	30	C・I	良好	褐色	№5・7・10(床+3~5) 胴部磨減 坏部内面粗いミガキ
11	土師器	高坏	—	4.6	—	35	C・H・I	良好	橙褐色	№1(床+13) 坏部木口ナデ
12	土師器	高坏	—	9.7	(13.3)	70	C・H・I・K	良好	褐色	№9(床+3) 胴部ケズリ後ヘラミガキ ホゾ接合
13	土師器	高坏	—	5.6	16.2	70	A・B・E・I	良好	褐色	№16(床+5) 銀雲母 胴部ヘラミガキ 内面指頭痕
14	土師器	大型埴	13.3	19.5	3.6	70	C・E・H・I	良好	褐色	№8(床+4) 胴部上端ナデ 下端ヘラケズリ
15	土師器	壺	(17.5)	3.4	—	15	C・E・K	良好	淡褐色	口縁部折り返し 胴部外面木口ナデ
16	土師器	壺	(12.8)	25.8	4.6	20	C・H・I・L	良好	淡褐色	№12(床直) 土師砕粒多く含む
17	土師器	壺	—	3.4	7.3	70	C・H・L	普通	褐色	№11(床+4) 外面ヘラナデ後粗いミガキ 内面ヘラナデ
18	土製品	土玉	最大径2.0~2.1cm	最大高1.7cm	残存率80%	孔径0.4cm	5.91g			

ガキが加えられている。10は遺存率が高いが口縁部を欠く。13は脚部がラッパ状に開く。14は炉跡近くの覆土下層から出土した大型埴。16は炉跡北西部の覆土下層から出土した壺。胴部口縁部から胴部上位は木口ナデと粗いヘラケズリ、指ナデ。胴部中位以下は縦方向の粗いヘラミガキが加わる。胴部内面もヘラミガキ調整。胎土中に土師砕粒かと推定される赤色粒子を多量に含む。18は土玉である。

時期は和泉期である。組成に供膳器が加わらない点で古段階～中段階の様相といえる。5世紀中葉頃を中心とした年代と推定しておきたい。

第31号住居跡 (第82図)

第31号住居跡はM・N-8・9グリッド、第29号住居跡と共に南に開く谷を臨む台地肩部に位置する。重複する第32号住居跡に北側のコーナー部を削平されていた。

平面形はやや平行四辺形状に歪んだ長方形で、規模は長軸長4.50m、短軸長3.26m、深さ0.30mである。主軸方位はN-31°-Wを指す。

床面は平坦で、全体的に硬く踏み固められていた。特にP2・P3を結ぶラインの西側は非常に硬化していた。また、貯蔵穴の周囲を囲むように土堤状の高まりが巡り、その上面も硬化していた。

覆土中にはローム粒子とロームブロックの混入がやや多く人為的な堆積環境も想定されるが、放置されたような遺物の出土状況から見ると、自然堆積とも考えられる。

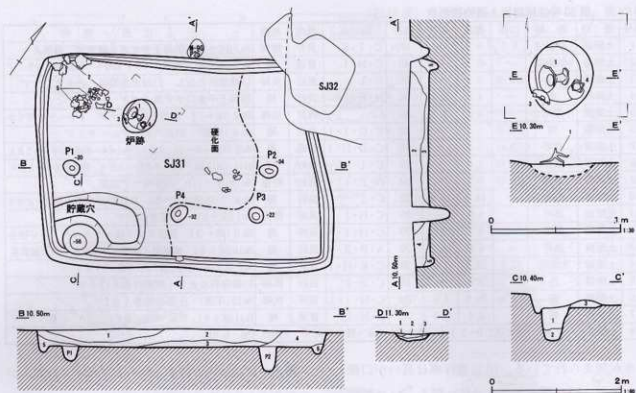
炉跡は中央やや西奥に寄った位置に設置される。ほぼ円形プランで、直径47～54cm、深さ9cm。焼土粒子が多量に含まれ、底面は被熱していた。

貯蔵穴は南東壁西隅に設置されていた。平面形態は円形で、直径47～54cm、深さ56cmである。貯蔵穴を取り囲むように土堤が築かれていた。

ピットは4本検出された。P1・P2は住居長軸線上に位置し、主柱穴と考えられる。P3・P4は後世の所産であろう。

壁溝は全周する。深さ4～12cm。

出土遺物は少ないが、床面上に放置されたような状況で検出されている。土師器埴・壺・高坏がある(第83図)。1は高坏。3・4の埴とともに炉の直上に倒れた状態で出土した。丁寧なヘラミガキ調整が施されるが、坏部内面はやや風化している。2～3は埴である。いずれも口縁部を欠いている。2は赤彩される。ヘラミガキ調整。3はヘラナデで、胴部中位以下はヘラケズリ。4は胴部ヘラケズリ後粗いヘラミガキが加わる。5は壺。炉の西側のコーナ



SJ31

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 黒色土・炭化物多い、ロームブロックやが多い
- 3 明褐色土 ロームブロックやが多い、焼土粒子少量
- 4 明褐色土 焼土土ブロック・ロームブロックやが少ない
- 5 褐色土 ローム粒子やが多い

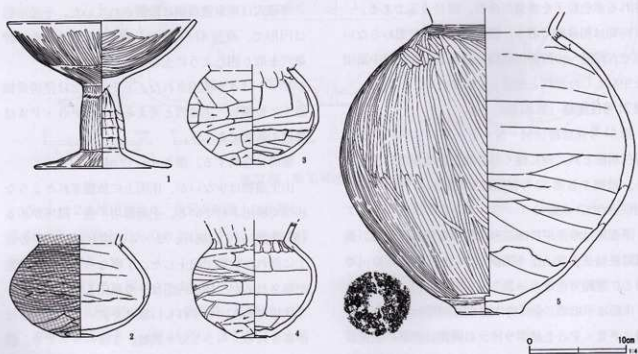
貯蔵穴

- 1 褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物少量、ロームブロック混じる
- 3 黄褐色土 ローム主体、黒色土少量混じる。

炉跡

- 1 暗褐色土 焼土粒子少量
- 2 赤褐色焼土
- 3 明褐色土 焼土粒子少量含む

第82図 第31号住居跡



第83図 第31号住居跡出土遺物

第30表 第31号住居跡出土遺物観察表 (第83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	高坏	19.1	15.2	14.1	75	E・H・I・K	良好	明褐	№1 (床直) 坏部内面風化顯著 外面丁寧なヘラミガキ
2	土師器	小型壺	—	9.6	3.5	65	C・G・H・I・K	良好	褐	№4・9 (床+0~15) 外面赤彩
3	土師器	埴	—	9.9	3.3	35	A・E・I	良好	褐	№3 (床直) 胴部下半ケズリ 上半ナデ
4	土師器	埴	—	11.7	3.3	90	C・I	良好	褐	№2 (床直) 胴部下半ケズリ後ナデ 上半ヘラナデ後粗ミガキ
5	土師器	壺	—	29.9	6.2	90	E・G・I・K	良好	褐	№5・7・9 (床+0~5) 胴部上端丁寧なヘラミガキ

一周辺から潰れた状態で出土した。胴部は丁寧なヘラミガキ調整される。口縁部を欠いている。

時期は和泉期である。第30号住居跡と住居形態や出土遺物が類似し、ほぼ同時期と思われる。

第32号住居跡 (第84図)

第32号住居跡は比較的小型の住居跡で、M-9グリッドに位置する。南西コーナー部は第31号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。西壁部と東壁部の一部が攪乱を受けていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.28 m、短軸長3.26 m、深さ0.48 mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

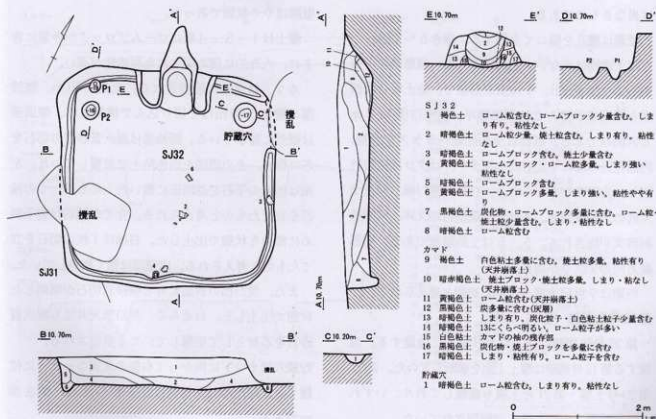
床面は概ね平坦で、全体的に硬く締まっていた。

特に、住居跡中央部から南壁にかけてはバリバリに硬化した面が形成されていた。

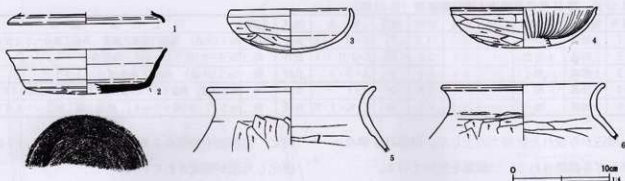
覆土は、ロームブロックが多量に含まれる土層が介在する (第4層) ため、一部は人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北壁に設置される。全長は1.32 m、燃焼部はほぼ壁内に収まる。煙道部は斜め上方、壁外に延びている。底面の掘込みは僅かで最下層に灰層が堆積していた。袖部は白色粘土を主体に構築され、壁の被熱は比較的弱かった。

カマドに向かって右側の北東コーナー部にビットが1本検出された。平面形は円形で、規模は直径37~38 cm、深さ17 cmである。規模が小さい点や



第84図 第32号住居跡



第85図 第32号住居跡出土遺物

第31表 第32号住居跡出土遺物観察表 (第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	(16.2)	1.1	—	10	I	良好	灰	胎土精選 湖西産 外面自然降灰あり
2	須恵器	環	(16.4)	4.6	(12.9)	30	I・K・L	良好	灰	No.4(床+12) 底部回転ヘラケズリ 見込み部ナデ 末野産
3	土師器	環	12.5	4.5	—	80	C・E・I	良好	褐	No.6(床+7) 北武蔵型環 内外面刺磨
4	土師器	環	(15.2)	4.0	—	35	C・E・I	良好	明褐	No.1(床直) 内面放射暗文 口唇部シャープなつくり
5	土師器	壺	(16.8)	6.7	—	15	C・G・I	良好	褐	カマド 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
6	土師器	壺	(16.4)	5.8	—	15	C・G・I	良好	暗褐	No.5(床直) 胴部外面ヘラケズリ 接合痕あり

問題点を残すが、位置的にみて貯蔵穴と考えておきたい。

ピットは北西コーナー付近に2本検出された。深さも浅く、規則性もないことから住居跡の主柱穴とは異なるものである。

壁溝は攪乱を除いて全周する。深さ5～13cm。

出土遺物は少ない。土師器環・壺、須恵器環・蓋がある(第85図)。1は須恵器蓋で、胎土から湖西産と推定される。2は須恵器環。推定口径16.4cmと大振りである。底部は全面回転ヘラケズリ調整。内面見込み部は不定方向の指ナデ、ロクロは逆時計回り。末野産と考えられる。3は内彎口縁、深身で丸底の北武蔵型環。4は北武蔵型の暗文環。内面放射暗文が施される。5・6は土師器壺である。胴部縦方向のケズリが加わる。

時期は7世紀末葉～8世紀初頭と考えられる。

第33号住居跡 (第86・87図)

第33号住居跡はM-9グリッドに位置する。重複する第12号溝跡は覆土上面を横断していた。また、第20号土壌・第21号土壌も重複しており、いずれも住居跡覆土を切り込んで掘削されていた。

平面形は方形で、規模は長軸長5.17m、短軸長

5.10m、深さ0.46mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面は平坦で、カマド前面から南壁に至る住居跡中央部は非常に硬く踏み固められていた。東壁・西壁際はやや軟弱であった。

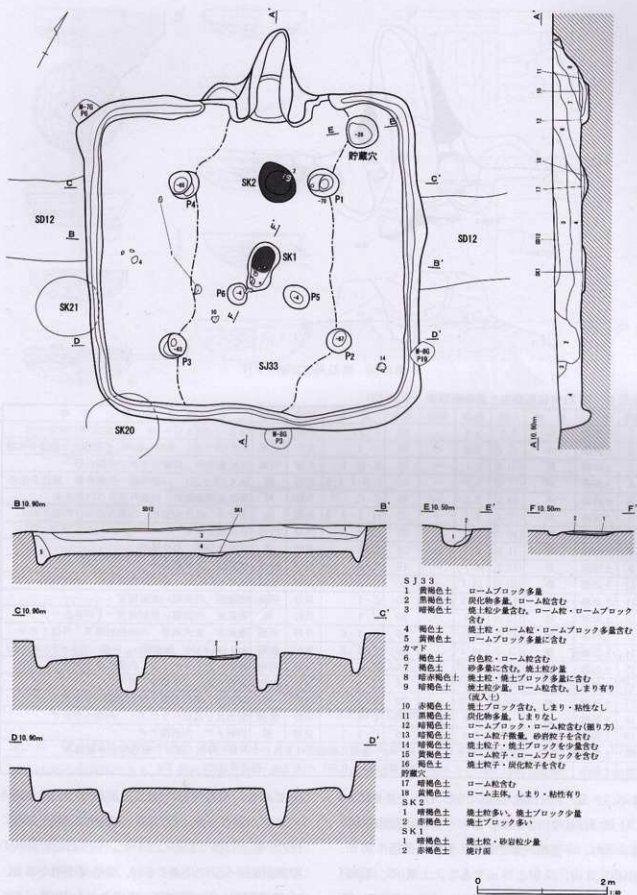
覆土は1・3・4層にロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北壁に設置される。全長1.50m、燃焼部は壁を0.30mほど切り込んで構築され、煙道部は壁外に延びている。両袖部は凝灰質砂岩の切石を芯に据え、その周囲を白色粘土で被覆していた。左袖は砂岩の平石を基底部に敷いた上にもう一つの袖石を立てたものと考えられる。立てた袖石は若干斜めに傾いた状態で出土した。右袖は1枚の切石を立てたものと考えられる。内壁部は強く被熱していた。

また、焚口部の前面にも2個砂岩切石が崩落した状態で出土した。おそらく、焚口部天井にも凝灰質砂岩を芯材として架構していたと推定される。

貯蔵穴はカマドに向かって右側の北東コーナーに位置する。略円形で、規模は直径49～50cm、深さ28cmである。

ピットは6本検出された。P1～P4が主柱穴で



第86図 第33号住居跡